
気ままに。

咲坂 美織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気ままに。

【Nコード】

N3745W

【作者名】

咲坂 美織

【あらすじ】

”黒ネコ族”の師匠は自由気ままに旅するのが好き。その日も弟子に稽古場を任せて一人放浪の旅へ。「貴様に会うとこれだから……」いくら悪態をついても出会ってしまったものはしょうがない。一番嫌いな気ままじゃない旅に出る。感想等いただけると嬉しいです。

嫌がらせの出会い（前書き）

師匠って、どんな格闘技やるんでしょうか？ 作者も知りません。稽古場は一応弟子が5、60人いる設定です。……師匠、そんなとこほっといていいんですか？ よろしければ感想をお願いします♪ これからの参考にするので。

嫌がらせの出会い

トントンとリズムを刻むように、右へ左へ軽くステップ。くるりとターンして相手の背後へと回りこむ。

「はい、おしまい♪」

相手の背中に容赦なく手刀をたたきこむ。背中に衝撃をくらった少年はバランスを崩してその場に崩れ落ちる。少年が私を見上げながらちよつと涙目になりながら笑いかけた。

「師匠、相変わらずお強いですね。少しは手加減してください」

「最年少で師範代やつてるやつが何言ってるの。しかしまた一段と強くなったわね」

「ありがとうございます！」

いくら師範代といっても中身はまだ10歳そこその少年だ。頭の上の耳を嬉しそうにぴよこぴよこ動かした。彼は素早さで名の通る”白ネコ族”の少年だ。

「じゃあ、そんな強いリア君に後のことはすべてお任せして、私はまた放浪の旅にでも出ようかな」

「そんな、ひどいです！ 師匠！」

「じゃ、後は任せたぞ、師範代♪」

後ろでリアが何か（泣き）叫ぶ声が聞こえたような気もするが、無視してさっさと歩きだす。自由気ままな”黒ネコ族”。それが私の二つ名だ。私は機嫌よく頭の上のきれいな三角形の耳をぴよこぴよこ動かした。

「さて、リアのやつもからかってきたし、今日は何しよっかな」

森の中の一本道をとことこと歩きながら、機嫌良く鼻歌を歌ってみる。そういえば以前、リアに師匠に機嫌が悪い時はあるのかと聞

かれたことがあったな。たぶんない。ただ一つの例外を除いて。

「……何の用だ。黒いの」

「おやおや、相変わらず貴女は機嫌が悪いですねえ。同じ”黒ネコ族”じゃないですか」

「誰が貴様とっ」

「まあまあ落ちついて。また出たそうですよ、あいつ。ついでに僕の名前はミカゲです」

「貴様が来るとすぐこれだ。だから嫌なのよ」

名前のことはさらっと無視。先のことが思いやられながらも、一応話は聞かなければならない。

「で、どこに出たって？」

「ここから北にある”黒の森”です」

「遠……。しかも故郷か。一応伝言御苦労さま。さつさと帰れ」

黒いのになつさと背を向けて、北を目指して歩き始める。今回はちよつと遠いから帰るのは遅くなるだろう。心の中でリアに謝る。いじりに帰れなくてごめん。

「……何のつもりだ？ 黒いの」

「だから僕はミカゲですって」

私はありつたけの殺意を込めて腕にひつついたものを睨みつけた。黒いのはリアよりも1、2つくらい年上だ。その分体も大きい。リアでさえ今がギリギリなのだ。それ以上のものは正直遠慮願いたい。

「離れろ、黒いの！」

「（だから、僕はミカゲです）今回は”黒ネコ族”の故郷ですよ。帰るついでについていきます」

一人で気ままに旅するほうが断然好きなんだけど……。仕方がないか。

「死んでも置いていくがいいな、黒いの」

「（だからミ……（省略））かまいません。自分の身くらい自分で守れます」

「……仕方がない。行くぞ、黒いの」
「……………（ハア）」

そんなこんなで、北の”黒い森”に到着。途中黒いのが崖から落ちかけたりしたような気もするが……、まあ気のせいだろう。現に息を切らしながらも私の後ろにいるしね。

「貴女は僕を殺す気ですか!？」

「そんなつもりは一切無かつただけだな」

「……通常1週間の距離を2日で走破。これを殺す気じゃないと言うんですか」

「……さてと、さつさと片付けて帰ろっかな」

とりあえず黒いのはその場に置いて、さつさと森の中に入ってしまったことにした。

「待つてくださいよ。どこに出たかも知らないのに勝手に森の中に入らないでください。だいたい貴女は子の森から……」

「分かつてるわよ。私がもうこの森からは歓迎されないことくらい今度こそ森の中に入っていく。今度は黒いのも文句を言わずについてきた。何よ、急におとなしくなっちゃって。さつきまでみたいにギャーギャー騒いでればいいのに。」

「……こんなところだけ、やっぱりリアよりも大人よね」

「? 何か言いました?」

「別に、何でもないわよ。で、あいつが出たのって、何処?」

「ここからさらに北にある”あの洞窟”です」

「……。あいつもいい趣味してんじゃない」

思わずため息をついてしまった。あいつに会うというだけで気が滅入るのに、まさかあそこにいるなんて、嫌がらせとしか思えない。「行くしかないのよね、嫌でも」

珍しく何も言わず、黒いのは黙って私の後に着いてきた。

嫌がらせの出会い（後書き）

次回は『あいつ』の正体が判明します！ たぶんリア君はここで
お別れです。気にいってくれた方がいればまた出すかもしれません
が……。

私とあいつ（前書き）

今回は師匠の過去の話がメインとなっております。ちょっとシリ
アス気味です。こんなはずじゃなかったんだけどな……。

私とあいつ

森の入口から走って10分。私たちは岩壁にぽっかりと黒い口を開けたような洞窟の前に立っていた。

「さてと、ご対面といきましょうか。危ないからあんたは外で待ってなさい」

「自分の身くらい自分で守れると言ったはずです。どうぞご心配なさらずに」

いつもならそのまま付いてこさせるところだが、今回はそうもいかない。

「黒いの、この中には何がいるのか分かってんの？」

「分かってますよ。貴女に伝えたのは誰だと思ってるんですか」

「いちいちムカつく奴ね。分かってんなら外にいなさい。いいわね」
黒いのにくるりと背を向けて洞窟の中へと入っていく。そつと黒いのの様子をうかがうと、ちゃんと外にいた。それだけ確認すると私は歩く足を速めて洞窟の奥へと向かった。

「しっかしここは10年前から何にも変わらないわね」

私が最後にここを訪れたのは10年前、私が7歳の時だった。

「そして、あんたは10歳だったわよね」

この洞窟の一番奥に広場のようになっているところがある。そのさらに奥に、一つの人影があった。私はその人影に殺意をこめた視線を送る。

「久しぶりだね、カラン。会えて嬉しいよ」

「私は嬉しくないわ。もう二度とあんたになんか会いたくない。父様と母様を殺したあんたになんか」

「つれないな。俺はお前の兄だろう？」

「お前なんかっ……！」

怒りに震える私の様子なんかお構いなしに、10年前に縁を切った兄、リュウセイが私のほうに近づいてくる。

「俺はずっとお前に会いたかったぞ、カラン」

「私をその名で呼ぶな！」

「おっと、これはあの日に君が捨てた名だったか」

あの日。私の人生で最悪の日。一瞬たりとも忘れたことはない。
この洞窟で、

「お前が父様と母様を殺した日だ……！」

「カラン！ そろそろ出かける時間よ！」

「はい、母様！」

私は手に持っていた帽子を急いで被ると、玄関で待つ母のところへと走って行った。

「カラン、帽子が曲がってるぞ。ちよつとじつとしてろ」

「ありがとう、兄様。さあ、行こう！」

私は母様と兄様の手を掴むと、元気よく外へ飛び出した。

「こらこら。カラン、そんなに急ぐと転んでしまうぞ」

「平気だもん！ あつ」

「だから言っただろう」

そう言って転ぶ直前に私を抱き上げてくれたのは父様。

「えへへ。ごめんなさい。父様大好き！」

父様にギュツとしがみつくと、父様は肩車してくれた。

「さ、ちよつと急ぐぞ。今日は大事な儀式の日だ。遅れたら大変なことになる」

”黒ネコ族”の子供は7歳になると一人ひとり自分用の短刀を贈られる。”黒ネコ族”にとって短刀とは誓いをたてるときに使う神聖なものであり、自分の短刀を持つということは一人前と認められることだ。

「やっと族長の愛娘が7歳を迎えたんだ。今日の祝祭は盛り上がるぞ」

今回儀式で短刀を贈られるのは全部で11人。その中でも族長の娘である私は最後に父から短刀を受け取る。

「リュウセイが7歳を迎えた時のことを思い出すな。あの時も長男だということで盛り上がったなあ。今から楽しみだ」

「大丈夫だよ、カラン。別にそんなに緊張するものでもないから」

「そうよ。ちゃんと”宣誓の言葉”は覚えたわね」

「はい！」

最後に短刀を受け取る者は、”宣誓の言葉”といって、”黒ネコ族”として誇りを守って生きていくことを誓わなければならない。だいたい”宣誓の言葉”を言うのはその儀式を受ける者の中で最も身分の高い者だ。

「三年前の兄様、かつこよかったなあ。私も兄様みたいに頑張る」
「そうそう。そのいきだ。頑張れよ、カラン」

そうしているうちに、儀式がおこなわれる”母なる洞窟”へとたどり着いた。この洞窟は”黒ネコ族”がすむ森の中でも最北端に位置し、儀式のとき以外では例え族長でも立ち入ることは許されていない。儀式を迎える子どもたちは、順番に洞窟の中へと入って行き、その奥で待つ族長から短刀を受け取る。

「それじゃ、私たち先に洞窟で待っているから。リュウセイ、カランを頼んだわよ」

儀式の準備をするため、父様と母様は先に洞窟の中へと入って行った。

「カラン、他の子たちはもう並んで待つてる。僕たちも行こう」

儀式を待つ子たちの中に混じって一人でいると、急に不安になって周りをきよろきよろと見回すと、兄様と目が合った。兄様は優しく微笑むと、手を振ってくれた。それだけで、不安が吹き飛んだ気がした。

儀式の順番を待つ間、いろんな人から祝福の言葉をもらった。それにいちいち笑顔で答えるのは疲れたけど、家族のためだと思って乗り切った。

「次、族長の娘、カラン」

「はい」

副族長に名前を呼ばれて洞窟の中へと入る。この先に父様と母様がいるはずだ。確か受け取って外に出たらそのまま演説台に上って”宣誓の言葉”だったよな。頭の中で何度も繰り返し練習した言葉をもう一度復習する。洞窟の広場が見えてきた。もうすぐ私の儀式が始まる。

私とあいつ（後書き）

ちなみに、キャラの名前に漢字をあてると、

カラン↓花藍

リュウセイ↓流星

ミカゲ↓御影

リア↓李亜

となります。師匠にはもう一つ名前があります。そのうち出てくるかと……。

あの日から（前書き）

今回も過去の話がメインです。あの事件とその後の話です。

あの日から

広場の奥の一段高くなった所に、父様と母様がいた。二人ともにつこりと笑って私を待っている。

「おめでとう、カラン。さあ、儀式を始めるわよ」

母様がひと振りの短刀を捧げ持ち、それを恭しく父様が受け取る。父様は私のほうへと向き直ると、その短刀を私に差し出した。

「これは命を奪うものではなく、誓いを守るものだ。生涯をかけて己の誇りと大切な者との誓いを守れ」

「はい」

私は短刀を受け取ると、それを両手で抱え込むようにして持つ。これで私は一人前として認められた。外でそれを宣言するため、私は出口のほうへと足を向けた。

「待て」

急に父様が私に静止の声をかけた。目を閉じて、じっと何かに聞き耳を立てている。どんな音もたてちゃいけないような気がして、私は息をひそめた。自分でも耳を澄ませてみる。

「足音？」

儀式中、洞窟の中へは儀式を行うもの、行われるもの以外の立ち入りを固く禁じられている。よって、一族のものではありえない。

「！？ 逃げる！ カラン！」

父様が何かから私をかばうように立ちふさがった。瞬間何かが刺さる音がした。

「あゝ、はずしちゃったか。まあいいや。後は族長一家だけだしね」

「兄、様？」

父様を挟んだ向こう側にはそこにいるはずのない兄様が立っていた。その足元には母様が倒れていた。

「兄様、母様から血が出る。早く助けてあげて！」

「何言ってるんだ、カラン。これは僕がやったんだよ。あの女が復

活するためには父上も母上も邪魔だったからね。もちろん、カラン、お前もだよ」

「……、リユウセイ、やめろ。実の、…妹、だぞ」

「父上、まだ生きてらしたのですか？ しぶといですね」

兄様が手の中でクルクルと短刀を回しながら私たちのほうへ近づいてくる。

「兄様やめて！ 短刀は命を奪うためのものじゃない、って父様が」

「何言ってるんだい、カラン。短刀っていうのはね、こういう風に使うためにあるんだよ」

「やめて！！」

私は父様と兄様の間に立った。

「カランそのうち君にも分かるようになるよ」

その時、なぜ兄様が私の鳩尾に短刀ではなく手刀を叩き込んだのか、私はいまだに分からない。私の意識は一瞬で真っ暗な暗闇に飲み込まれた。

「あの後、私は父様と母様の遺体と一緒に発見された。そこには血のこびり付いた私がもらうはずだった短刀が落ちていた。そしてあなたは行方不明。その後は想像がつくでしょ。私は一族から追放された。親殺しの罪でね」

無意識にギュッとこぶしを握る。当時、何も訳が分からないまま森の外へ放り出され、何度も獣に襲われかけた。今稽古場を持つほどの腕を鍛えたのはその頃からだ。

「何であの時私を二人と一緒に殺さなかった！ あの時の苦しみは…… 思い出したくもない」

何かから自分を守るように、自身の体を抱きしめる。足元に視線を落とし、寒気が消えるのをじっと待つ。そこでふと影が差した。

「お前が必要だったんだ。強くなったお前がな」

急いで顔を上げると、至近距離にあいつがいた。そして、昔のよう
に私の頭を優しく撫でた。

「触るな！」

手を払いのける。不用心に相手を近づかせた自分の無防備さを呪
った。こいつの前だと調子が狂う。

「東の森へおいで。そこでお前を待ってる。すべてはそこで始まる
から」

「待て、用事はまだ……」

どこかに隠し通路でもあるのか、あいつの姿が一瞬で消えた。

「くそ。どうして私はいつもこうなのよ……」

自分の悪態をつきながらも、いつまでもここにいる必要はないの
で出口へと向かう。広場の出口に、人影があるのが見えた。

「終わりましたあ？　今回は会えたみたいですけど、また逃げられ
たんですねえ」

「私は洞窟の外にいろと言ったはずよ、黒いの」

「それは僕の自由です。で、東の森に行くんですか？」

「行くしかないでしょ。さてと、いつまでもここにいたら他の奴ら
に見つかっちゃう。さっさと退散しないと」

「僕も行きますよ」

「結構よ」

黒いのをその場に残し、私は一人洞窟の外に出た。

あの日から（後書き）

次回、師匠（たち）は旅に出ます。あの子も再登場、……しますかね？ 次回からはコメディ風にしたいと思います。シリーズは苦手だっつ！

第2の故郷（前書き）

意外とリア君が好評だったので再登場します。相変わらず師匠にいじめられています。

第2の故郷

「ただいま〜！ リア、元気にしてた？」

「師匠！？ お帰りなさい！」

まるで子犬のように駆け寄ってきたのは稽古場を任せているリアだ。"白ネコ族"特有の白い尻尾をパタパタと元気よく振っている。こいつは生まれる種族を間違えたらしい。

「今回はわりと早かったですね。これから稽古つけてくれるんですか」

「う〜ん、それがね、またこれからすぐに出かけなきゃいけないのよ。今回はマジで長期になるから一回顔見せに戻ってきたというわけ」

「そんなぁ……。僕またお留守番ですかぁ？」

いつもはピンと元気よく立っているリアの耳がしおれた。

「そんなこと言ってもね、リア以外に師範代任せられる奴いないし。じゃあ、頑張つてね」

につこり笑って肩をポンと叩くと、リアはその場にしゃがみこんで地面にのの字を書き始めた。可愛いからそのままにしておこう。

「よし、お前ら！ 久々に私が稽古つけてあげるわ。順番に並びなさい」

稽古場の奥のほうでそれぞれ稽古していた少年少女たちが一斉に駆け寄ってきた。

「今日は師匠が稽古つけてくれるんですか！？ 僕が一番！」

私が、僕がと騒ぎ立てる子どもたちを眺めまわしてずっと深く息を吸う。

「順番！！ 全員相手してあげるから、一人ずつ並びなさい！」

今度は素直に返事して一列に並び子どもたち。先頭の少年が一歩前に出てお願いします、と頭を下げる。

「あら、入ってきた時よりもずっと礼儀正しくなってるじゃない」

「リア師範代は礼儀にだけは厳しいですから」

なるほど、あいつのおかげか。私が教えるよりもずっといい。

「リアも、何で私に習ってあんなに礼儀正しくなれたのかしら。奇跡としか言いようがないわね」

実際私が直接教えた奴らはリアを除く全員が好戦家だ。まあ、リアも訓練だけなら組み手とかを嬉々としてやるのだが。礼儀関係も教えた記憶がない。

向かってくる子どもたちに足払いをかけながらそんなことを考える。体制を崩した子どもたちを片っ端から投げ飛ばす。もちろん加減してだが。

「って、ちよつとあんたたち！ 一人ずつって言ったでしょ！？」

稽古場はもう乱戦状態だ。背後からも誰かが近づいてくるのが分かった。

「甘いわよ、リア！」

背後から近づいてきたリアの腕をとって投げとばす。

「ちえ、ばれましたか。さすが師匠です」

結構本気で投げたのに平然と受け身をとって即座に立ちあがるリア。
ア。

「あんた、また強くなったわね。師匠として嬉しいかぎりだわ」

「光栄です！」

そう言っていきなりリアが飛びついてきた。反射で受け止めてしまった。すぐに周りの子供たちが師範代だけずるい！ とかよく分からないうちに飛びついてきた。

「お前らやめろ！ 稽古にならないじゃない！ つか真面目に私死ぬー！」

5、60人の子どもたちに押しつぶされて思わず悲鳴を上げる。もうただのじゃれあいだ。

「あなたたちは何やってるんですか」

呆れた顔をして稽古場に入ってきたのは外で待っていたはずのミカゲだ。

「あ、ミカゲさん！ お久しぶりです」

すぐにリアが反応してぴよこんと立ち上がる。そういえばこいつは一時期この稽古場に通っていたな。ちなみにリアの兄弟子。私が師範代にしようと思っていたら、やめていきやがった。だから実力は実質リアよりも上だ。私には到底かなわないがな！

「そろそろ出発しないと日暮れまでに隣の村に着きませんよ。まあ、夜の森で狼たちと乱戦しながら行きたいのなら別にかまいませんけどねえ」

ミカゲが言う狼とは”狼族”のことだ。夜行性で私たち”ネコ族”とはあまり、というよりもかなり仲が悪い。夜の森をうろついていると必ずと言っていいほど襲われる。

「別に襲われても追い返すだけだから別にいいけど、面倒臭いわねじゃ、私出発するわ」

まだ引っ付いている子どもたちを引き？がしながら稽古場の外へと向かう。バイバイ師匠！ とか言いながら手を振って見送ってくれる子どもたち。……いい子どもたちをもったわ、私。

ミカゲを伴って稽古場を出ると、誰かが服の裾を思いつきり掴んだ。突然のことにバランスを崩しかけながらもその掴んだ相手を睨みつける。

「どういうつもりかしら？ リア」

「僕はダメなのに、ミカゲさんは連れて行くんですか？」

……ウルウルした目で上目遣いに見上げてくるのは反則だろう！
？ って、いかんいかん！ 可愛いからこそ今回は連れていっちゃダメだわ。

「ダメ。あんたにはあの子たちのこと守ってもらわなきゃいけないんだから。あいつらのこと頼むわよ」

最後に頭をポンポンと撫でて今度こそリアに背を向ける。

「……………（あいつ付いてくるな）」

「……いい加減出てきたら？ いるんでしょ、リア」

稽古場を後にしてかなりのスピードで歩く（いや、あれは走るだ！ byミカゲ）こと3時間。足も止めず、振り向きもせず、背後に声をかけた。

「……いつから気づいてたんですか？」

「あんたが私たちに追いついたところから」

「……最初からですか」

隠れることをあきらめたのか、消していた気配を元に戻してリアは私たちに近づいてきた。

「子どもたちはどうしたの？」

「トーマさんに任せてきました。師匠たちが戻ってくるちょっと前に、フラツと帰ってきてそのまま奥で寝てたんですよ」

「あいつ、帰ってきたの」

トーマとは私の弟子の一人で、確か最年長のはずである。実力は、私が一番最初に師範代に任命した男だから十分すぎるほどある。

「ま、あいつが帰ってきてるなら心配ないか。帰ってきたときに文句を言われそうね」

トーマは何故かびっくりするほど私に似ていて、一人放浪の旅をするのが好きなのだ。でも、責任感は強いほうだから、子どもたちを放ってどこかへ行ってしまふことはないだろう。

「……帰りにトーマの好きな魚でも持って帰ってあげるか」

第2の故郷（後書き）

トーマ↓冬馬

です。ちなみに、16歳の”虎ネコ族”です。

そのほかのキャラをまとめてみると、

師匠↓17歳

リア↓12歳

ミカゲ↓14歳

リュウセイ↓20歳

です。種族は小説の中で説明したとおりになります。

怪しい集落（前書き）

今回も師匠は素晴らしい脚力を見せてくれます。番外編もちよくちよくアップしていきます♪

怪しい集落

リアと合流したところから歩いて（走って！ byミカゲ&am p・リア）3時間ほどのところに、一つの集落があった。人（ネコ？）の気配はなく、荒れた形跡もない。

「っしゃ！ 取り放題♪」

「いやいやいや、待ってください師匠！ それは悪役のセリフですから！」

「えー、いいじゃない。誰もいないし。私に拾われて使われるほうが道具も喜ぶわよ」

「どついう理屈ですか！？ そもそも変だと思いませんか？ こんなにきれいに残っているのに誰もいないなんて」

「それもそうですね。普通は人が一人もいなくなるのは襲われた時か、災害の時ですからね。どちらにしてもこれはきれいすぎますねえ」

「むう、あんたたち優秀すぎよ。誰から教わったの、そんなこと」

「立派な反面教師がいましたから」

「……それって、私？」

二人がほぼ同時にため息をつき、私に背を向けた。何よ、鍛えたのは私じゃない！

「リアの言うとおり、これはちょっと怪しすぎます。流行り病の可能性もありますし、下手したら入った瞬間苦しむ羽目になりますよ」それは怖い。というわけで私はおとなしく二人の意見を聞くことにした。うん、私偉い。

そんなことを考えていると、ミカゲにすごく冷たい目で見られた。あいつ、私の心が読めるのか！？

「……貴女の表情は分かりやすすぎます」

「え、そうですか？ 僕には全然分かりませんけど」

「……………（鈍い師弟め！！）」

ミカゲがさつきよりも深くため息をついている。まあ、それは今に始まったわけじゃないから放っておいてもいいか。

これじゃ誰が保護者か分からない、なんて聞き捨てならないことをぶつぶつ言っているミカゲを何とか無視（私偉い！）して、集落から少し距離をとりながらリアに聞いてみる。

「リア、何か聞こえるか？」

「いえ、特に何も。生きているものがある音はしません」

私たちそれぞれのネコ族には特殊な力を持つ子供がたまに生まれる。リアもその一人で、彼は異常な聴力を持つ。ちなみに私とミカゲ、トーマも持っていて、私は視力、ミカゲは嗅覚、トーマは石や植物、ようするに自然界にあるものから記憶を読み取る。ま、意識して使わないと普通の奴らと同じなんだが。

「そうだな、私が”見て”も動くものはない」

「いえ、何かいますよ。何か、……血の匂い？」

「何で疑問形！？ 血の匂いなんてお前一発で分かるだろ！」

「だから普通の匂いじゃないんですよ。たぶんここにいるのはネコじゃない」

ほんの少し、ミカゲの顔が引き締まる。珍しく緊張でもしてるのか？ …… それにしてもネコじゃないものか。森の中にこうやって集落を作るのはネコの一族しかない。狼はそもそも大人数で生活するのを嫌うから集落を作るとは思えない。

「もともと住んでいた一族が何かに襲われたのか、それともその前に気がついて逃げ出したのか……。後者だいいいな」

「そうですね。僕もここに住んでた人が無事だったらいいなと思います」

「どうします？ 毒とかウイルスとかがいるような匂いはしませんし、入ってみますか？」

ミカゲが少し悪戯っぽい顔をしながら見上げてくる。これは私を試している顔だな。私の度胸、見せてやろうじゃないの。

「なら入ってみようか。ここ突っ切ったほうが次の村近いし」

私の眼にはこの集落をまっすぐ突っ切った先に村があるのがはっきりと見えていた。

「ちよつと怖くないですか？ 迂回しましょうよ……」

「お、怖がりだね、リア。かーわいい♪」

「！ からかわないでください、師匠！」

顔を赤くして拗ねているリアを笑いながら集落の中へと一歩踏み出した。後にミカゲ、リアと続く。……数時間後、私たちはリアの意見を聞かなかったことを後悔することになる。

怪しい集落（後書き）

補足

トーマ君の特殊能力、く記憶を読み取る力く

1 ・木や花、石に触れる。

2 ・意識を集中して知りたい記憶を探す。

3 ・記憶を覗かせてもらう。

例）リアがこの石に座って花占いをしていた。「師匠は帰ってくる、帰ってこない、……帰ってこない!？」リア号泣。

4 ・可哀想な弟弟子を慰める。

巨大生物（前書き）

リア君は相変わらず可哀想な子です。

誤字脱字等を見つけた場合は、随時直していくので指摘お願いします。

巨大生物

しばらく集落の中を探索した後、中央の広場（たぶん祭典用だろ
う）に集まって、それぞれの意見を交換することになった。

「私が見たところホントに何も無いわ、ここ。きれいさっぱり人だ
けが煙のように消えちゃったみたい」

「僕も同じ意見です。地面を歩く音どころか、空気が動く音すらし
ません」

私とリアが頭を抱える中、黒いのが一人だけ気難しい顔をしてい
た。

「おかしい。……この匂いは一体どこから……？」

「何か分かるのか、黒いの？」

「だからミカゲですってば。……何か変なにおいがするんですよ。
血のような違うような……」

突っ込むべきところはしっかり突っ込んで黒いのが答えた。さす
がうちで一番の突っ込みだ。リアではまだまだ足りない。

「だいたい、何処から匂うのかもよく分からないんですよ。強いて
言うなら、この集落全体から、でしょうか」

「うわ、やめてよ。地面掘ったらそこらじゅうから変なもの出てく
るとか……。考えただけで寒気がする」

「地面？……………（うわあ、なんかすごくいやな予感が）」

「どうしたんですか？ ミカゲさん」

「リア、お前だけでも先に逃げ——！？」

黒いのがリアに何か言いかけたところで、地面が割れた。

「うわ、何だこりゃ！ 意外と深いな」

「何変なところで感心してるんですか、師匠！」

「二人とも！ 落ちますよ！ 舌嚙まないように口を閉じて——！
？」

「自分で言っておきながら、噛んだね」

「噛みましたね」

身体能力が総じて高い私たちは特に苦勞することもなく、5 mほど落ちて着地した。一人だけ私たちに背を向けて口元を手で押さえている黒いのは、まあ、アホなんだろう。

「ひはひ（痛い）。ひははんはつは（舌噛んじやった）」

「僕、ミカゲさんがこんな間抜けだったなんて、初めて知りました」
「まあ、私の弟子だからね」

「なるほど」

納得するな！ と私は心の中で突っ込んで、一人痛がっている黒いのを無視してあたりを見渡した。黒いのが言ったことが本当ならば、このあたりが匂いの元凶……かもしれない。

「……師匠、何か聞こえます。何か、いま聞きたくないような音が……」

私もリアが見つめるほうへ視線をやる。しばらくすると、暗闇の先のほうに何かぬめぬめと光る、白っぽいものが見えた。

「ひっ」

隣でリアが小さく悲鳴を上げる。そういえばこいつ、トーマに似て両生類とか爬虫類とか、ああいう系統のもの、すっごく苦手だったよな。

私たちの目の前には巨大なナメクジのようなものがいた。しかも体中から青い体液のようなものを撒き散らしている。

「気持ち悪……」

「なるほど、匂いの元凶はあれでしたか」

昔から私は目の前にいるものの小さい奴を持ってトーマやリアやらを追い回してるが、正直このサイズまででかくなると気持ち悪い。少なくとも積極的に触りたいとは思わない。

「黒いの、気持ち悪くないの？ 冷静に見えるけど」

「貴女に昔、散々これで追いかけまわされましたから」

だからもう慣れました、と相変わらず可愛くないな。黒いのにくせに。

「どうする？ これやつけないとたぶんここから抜け出せないよ。ちなみに私は嫌」

「僕は絶対嫌です！」

「僕もできれば触りたくないですね……」

こんな会話を繰り返しながら、私と黒いので素早くアイコンタクト。悔しいがこいつは意思疎通というものがしやすい。

「じゃ、公平にじゃんけんで……！」

と口では言っておきながら素早くリアの両手を掴む。ちなみに黒いのは両足を抱えている。また黒いのとアイコンタクトして無言でタイミングを合わせる。

「じゃ、リア、頼んだわよ！」

「普段仲悪いのに、何でこんなときだけ息ぴったりなんですか!?!」
何かリアが泣きことを言っていたような気がするが、いつものことなので無視した。

巨大生物（後書き）

次回、リア君の可哀想なターンが続きます。

新たな敵（前書き）

やっとリア君が解放されたと思ったら、また敵です。

久々に師匠の真面目モードが入ります。常にふざけてるからな、師匠って。たまには真面目になってもらいました。

最近ミカゲ君も師匠と仲良くなってきました。もともと師匠はミカゲ君のこと大切に思ってるんですよ。照れ屋なんです。好きな子はいじめたくなるというあの原理です。

新たな敵

「嫌ー！！」

「ほら、頑張つてリア！」

「早くしないと暗くなつて出られなくなりますよ」

巨大ナメクジにリアが挑み始めてから早3時間。リアは逃げてばかりで戦いになってない。リアの背後の壁際に並んで座った私と黒いのは時々面白がつて声援という名の茶々を入れる。

「私、こんなナメクジに負けるような鍛え方をした覚えはないわよ！」

「そんなこと言つたつて！ 嫌だ、こいつ気持ち悪いです！ 触りたくないし触られたくない！！」

「もう、しょうがないわね……」

「お、師匠のお出ましですか」

立ち上がった私に反応する黒いの。その黒いのを上から見下ろしながら私は不敵に笑う。その顔を見た黒いのが顔を引きつらせる。

……さすがは一時期私の弟子をやっていただけはあるわ。いい勘してる♪

「行きなさい、黒いの！」

「えー、僕が行くんですかあ？ ここは可愛い弟子を助けるために師匠が出る場面ではないですか」

「師匠命令よ！」

「もうとつくに貴女の弟子ではなくなりましたけどね。……仕方がない、困った師弟ですね」

そう言つて懷からやや太ぶりのナイフを取り出して立ち上がる黒いの。

「リア、ちよつとそこどいてください！」

リアが黒いの前からどいた瞬間、地面をけた黒いのがもうナメクジの目前まで迫っていた。そのままナイフを一振り。一撃でナメ

クジを沈める。

「黒いの、もう一度道場戻ってきて師範代やる気はない？」

「嫌です」

あっさり、しかもさわやかスマイル付きで黒いのは言い切った。ここまで綺麗に即答されると帰ってきてほしくもない相手だとしてもちよつとムカつくわね。

「何よ、私だっていくらあんたが「はい、ストップです」」

私がちよつとキレたのを感じたのか、リアがストップをかけてきた。さすが弟子。自分の師匠のこと良く分かつてるわあ。

「ミカゲさん、僕の代わりに倒してくれてありがとうございます。おかげで助かりました」

必殺、リアの天使の微笑み。エンジェル・スマイル この技は老若男女を問わず、すべてのネコに通用する。試したことは無いが、たぶん狼にも効くだろう。もちろん、脇で見ていた私にもしっかり効いている。可愛いなあ。

「……まあ、文句は後でしっかりと、然るべき相手に。とりあえず上に戻りましょう」

黒いのは少し下がると、助走をつけて跳んだ。続いてリアも。：

：足自慢の若いのはいいわ。二人とも元気ね。

「何やってるんですか、師匠！ 早く来てください。これくらい師匠なら余裕でしょ？」

「えー、私も跳ぶの？ リアたちが引つ張ってくれないの？」

「ふざけてないで早く上がってきてください。いつまでもそこにいとまたナメクジがきますよ。あと2、3匹分くらいの匂いがします」

「それを早く言いなさいよ！」

私は助走無しでそのまま軽く5mほど跳ぶ。余裕で穴を抜けた私を黒いのとリアがジトつとした眼で見つめる。

「……元気じゃないですか、師匠」

「……………（相変わらず嫌な人だ）」

あれで僕たちより強いんだからー、とかリアと黒いのが二人で愚

痴っている。何よ、これでも私はあんたたちの師匠よ。これくらいで出来なきゃあんたたちの師匠なんか勤まらないわ。何か文句ある？

私が一人拗ねていると、突然リアの耳がピクツと動く。とたんに目を細めて辺りをうかがう私たち3人。さっきまでの弛んだムードは何処へ行ったのやら、全員の顔が厳しいものへと変わっていた。

「東方、1、2……10匹？ たぶん狼です」

「みたいね。10匹なんてそんな大勢でいるところ初めてみたわ。とりあえずこの人数であれを相手するのは面倒ね。隠れましよう」

私の眼ははつきりと東からやってくる狼たちの姿が見えていた。

「あいつらが来るのが東からじゃなかったら先に進むんだけど……」

私たちはもと来た道を音を立てずに駆け戻る。集落の外に出ると、各自手頃な木に上り、姿を隠す。木の葉のおかげでこちらからは狼の様子が確認できるが、あちらからは見えないだろう。

東からやってきた狼たちは私たちが落ちた穴を覗き込むと、リーダー格っぽい狼が口を開いた。

「いいか、お前ら。ナメクジの溶け具合からまだ奴らはこの辺に居るはずだ。探せ！」

あのナメクジ溶けるのか！ って、突っ込むところはそこじゃない。あいつら確かに、奴らはまだこの辺にいる、と言った。奴らはもちろん私たちのことだろう。

「……まずいな」

狼たちは総じて鼻がきく。最初から私たちを探すつもりなら匂いでこちらにすぐ気がつくだろう。

私たちと狼の距離、100m。

新たな敵（後書き）

次回、ちよつと話はシリアスに。物語が少し進みます。新キャラも出る予定です。

双子の狼（前書き）

新キャラ登場です。とはいってもほとんどしゃべりませんww

そして師匠が大暴れます♪ やっぱ強いです、師匠は。

双子の狼

「師匠、どうしますか？」

「どうするも何も、やるしかないでしょう。ちょっと面倒だけど。あんたたち二人で4人潰しなさい。後は私がやるわ」

「大丈夫ですかあ？」

「……なめてんの、黒いの？」

いちいちム力つく黒いのは放っておいて、狼たちの背後をとるため、気配を殺しながら移動を始める。幸い私のほうは能力のおかげで敵を見失うことはない。

「さて、誰から潰そうかしら？」

今は誰もいなくて空き家となっている建物の影に隠れて、敵が近づくの待つ。しばらくすると、一匹近づいてくる。あいつからでいいか。

「――！？」

不意を突いて敵の口を塞ぎつつ、影に引つ張り込んで鳩尾に手刀を叩き込む。声もなく沈んでくれた。しかも周りは気がつかなかったらしい。

周りをこっそりうかがってみると、あっちもちょうど一匹沈めたところなのか、リアが親指を立ててウインクしてきた。……いちいち可愛いなあ、もう。

そのまま続けて2人ほど沈める。このあたりで相手も異変に気がついたらしい。

だがもう遅い――！！

今までいた場所を離れ、敵に気がつかれないようにリアたちのもとへ行く。口の動きだけで伝える。

「（リーダー沈めてくるから、後頼む）」

「（了解です）」

……いつか役立つだろうと思ってこの訓練させておいてよかった

わ。あの時は単なる遊びだったのに。

私が元の場所に戻ってあいづらに合図すると、二人は同時に別方向から飛び出す。それぞれ一番近くにいた相手を掴み、投げる。そしてそのまま4人まとめて乱戦へ持ち込む。

……我が弟子ながら良い腕してるな、こいつら。

私のほうもただ見とれているだけではなく、行動を開始する。リアたちに気を取られているリーダー格の奴の背後へ回る。

さすがリーダー、私が背後に回った時点で気がついて振り向いた。……だから、もう遅いんだって。

「セッ！」

気合いとともに回し蹴りを放つ。……あ、掴まれた。でも、

「甘い！」

掴まれた脚を軸に体をひねり、全体重を乗せた回し蹴り。……蹴るのつていいよね。スツキリ

私の渾身の一撃を防ぎきれるはずもなく、側頭部にクリーンヒットする。そのまま崩れるリーダー格。大したことないわね……！

「師匠！ 終わりましたか？」

「今終わったところよ。そっちは？」

「それが……」

振り向くと、そこには困った顔をしたリアと黒いのが居た。そして、そのやや下に視線を向けると、

「どうしましょう、この子たち」

一目で狼族のそれと分かる犬耳を頭に乘せた男の子と女の子が正座していた。しょんぼりと頂垂れている様を見ると、つい抱きしめてしまいたくなる。

「……これだから貴女は」

黒いので声が気がついた。私は狼族の二人をまとめて抱きしめていた。だって、可愛いんだもん……！

「あんたたち、名前は？」

「……フィア」

「……ファイ」

「……双子？」

同時にこくりとうなずく双子。女の子のほうファイで、男の子のほうファイね。

「あんたたち、狼族よね」

こくり。

「もしかして親いない？」

こくり。

「私たちと行きたい？」

こくり。

よし、連れていこう！

ファイとファイの手を掴んで立ち上がる。そのまま進もうとして、リアと黒いのに止められた。

「なんでよお。いいじゃない。この子たちもう戦う気なさそうだし、可愛いし」

「可愛いの関係ありませんから！ 狼族の子を連れていくなんて、正気ですか！？」

「なあに、リア、嫉妬お？ 今まで可愛い系は自分だけだったから、かまってもえなくなると思ったんでしょー。大丈夫よ。ちゃんとかまってあげるから」

「違いますって！！ それと誰が可愛い系ですか！？ かまってほしいなんて一言も行ってません！」

「いや、リアは無言でかまってと言っているようなものですからねえ」

「ミカゲさんまで！？ 誰か僕の味方はいないんですか！？」

「うわー！ と叫び声をあげているリアも双子と一緒に懷に抱え込むと、じつと見つめる。

「……そんなに見つめても、僕はその中に入りませんから」

「冷たい」

「どうとでも言うてください」

一人離れたところで拗ねている黒いの（拗ねてない！ byミカゲ）は放っておいて、腕の中の三人を力いっぱい抱きしめる。

「ムグウ、し、師匠、苦しい、です」

腕の中からリアのうめき声が聞こえた。どうやら力を入れすぎてしまったらしい。よく見ると双子も顔を真っ赤にして息苦しそうだ。

「うわぁ、ごめんごめん」

手を離れたとたん、ゼエハアと荒い息をつく三人。……お、双子の表情が少し柔らかくなった。落ちついてきたのかな。

「やっと解放されて安堵しているんですよ。いくら狼族とは言え、子供を殺すつもりですか、貴女は。自分の力の大きさをすっかり理解してください」

「うう、ごめんさい」

黒いのに怒られた。でも悪いのは私なのできちんと謝る。双子ちゃん、ごめんね。リアも。

「だいたい、貴女は今ちょっとテンション上がりすぎです。落ちついてください」

……しょうがないよ、それは。だって双子ちゃんが可愛すぎるんだもん。

双子の狼（後書き）

双子ちゃん、次回からは緊張も解けたのか、ちゃんと喋ります♪
ついでに襲撃者たちの謎も明らかにするかと。

あいつの策略（前書き）

双子ちゃん……可愛い!!

自分で書いておきながら言うのもなんですが……。

あいつの策略

狼の双子が落ちつくまで少し休憩し、二人が落ちついたところで事情を訊くことにした。

「あのねー、ファイたちはある人に頼まれて来たのー」

「来たのー」

「誰に頼まれたの？」

「ファイたちには分かんないー」

「分かんないー」

先に話しているのがファイ、後に繰り返しているのがフィィ。可愛いんだけど、若干うざいな。慣れるまでの辛抱か。

「で、あんたたちはどうするの？ 狼族のところに戻る？」

「それは絶対に嫌ですー」

「嫌ですー」

双子が泣きながら抱きついてきた。そんなに辛かったのだろうか、狼族の中での暮らしは。

さすがに小さい子供が泣いているのは情に訴えるものがあるらしく、リアと黒いのの顔は幾分か柔らかくなっていた。

「私たちはお父さんもお母さんもないからね」

「いつつもしじめられてたの」

「でもね、今回の”さくせん”で”おてがら”たてたらね」

「族長さまがお父さんの代わりになつてくれるって言ってたから」

「自分たちから志願したのー」

「したのー」

私たち3人は言葉を失った。こんなに幼い子供が自分の身を守るために自らこんな危険な作戦に加わったというのだ。その族長がどんな人物なのかは知らないが、おそらくこの双子は騙され、利用されている。

「私たちと一緒に行こう。大丈夫。お姉ちゃんはとーっても強いの」

よ」

そう言つて二人を抱きしめると、二人はにつこりと笑つた。

「ありがとう、お姉ちゃん」

「ファイたちも何か役に立ちたい」

「ありがとう、その気持ちだけで十分よ。リアに黒いのも文句ないわね」

振り返りながら聞くと、二人とも首を縦に振つた。

さて、と。出発する前にもう一仕事するか。無言で黒いのが太い縄を差し出してきた。気がきくな、こいつ。リアも見習えよ。

私はまだ気を失っているリーダー格をこれでもかというほどきつく縛りあげた。まだ起きないので軽く頬をはたく。そこで呻きながらリーダー格が目を覚ます。

目を開けること数秒。自分の状態を確認して自分の状況を理解したらしい。話が早くて助かる。

「さあて、洗いざらい吐いてもらいましょうか？」

「……師匠、目が悪人です」

「貴女の辞書には手加減という言葉がないのですか？」

「敵に対してはね」

「（絶対にこの人だけは敵に回したくない）」

何もしゃべらないが、気配だけで双子もおびえているのが分かる。敵に女という理由でなめられるわけにはいかないからね。このぐらいがちようどいいのよ。

……と思つたら、

「まったく貴女は……。相手が怯えて口もきけなくなつてるじゃないですか。代わってください。僕がやります」

何やら不気味な笑顔を浮かべた黒いのがリーダー格を連れて私たちから離れていった。何するつもりだあいつ!? あんな生き生きとしている黒いのは初めてみた……。

妙にぐつたりとしたリーダー格と、妙に肌がつやつやとしている黒いのが戻ってきた。ホントに一体何があったんだ！？

「だいたい分かりましたよ、敵が」

「大丈夫か、お前……」

思わず敵のほうを心配してしまった。声をかけても放心状態でピクリとも反応しない。もとは仲間だったはずなのに双子は怖がって近づこうともせずリアの後ろに隠れている。ムムツ！ いつの間にリアに懐いたんだ、この二人！

「どちらかといえば、残念なお知らせになりますね。僕の予想が正しければですけど」

「誰が依頼人か分かったのか？」

「まだ僕の予想ですけどね。……たぶん、”あの人”が関わってます。こいつも実際に依頼人の顔を見たわけではないそうなので、あくまで僕の予想になりますけど」

「……真相は進んでみないと分からない、か」

黒いのがいつになく真剣な顔をしているから、私をからかって楽しんでる可能性は低い。

もしあいつが関わっているなら、この先少し慎重に進まなければならにだろう。

「何がしたいんだよ、あいつ」

そこには不思議そうに私を見上げる双子が居た。

あいつの策略（後書き）

次回、隣村に入ります。

女の子の楽しみ（前書き）

今日は師匠が珍しく女の子らしいです。そしてまたリアは可哀想な子です。

師匠の二つ目の名前も出てきます。

女の子の楽しみ

「やっとなつた。結構ぎりぎりだったわね」

隣村についたのは日も暮れかけたころ。双子を連れているところを狼族に見られてたら面倒なことになってたわ。

双子はそこそ大きな村に来るのは初めてらしく、きよろきよろとあたりを見回している。

「フィアとフィイは村に来るのは初めて？」

「狼は村とか集落とか作らないから、今日あの集落に行つたのが初めてなのー」

「のー」

「人がたくさんいるってことは、何か作戦でも実行するのー？」
「のー？」

うん、相変わらず弟はほとんど喋らない。にしても、作戦を実行するときしか人が集まらないなんて、この二人は一体どんな暮らしを送ってたんだ？

「でも、作戦とかで人が集まるようになったのは最近のことなのー」

「それまではみんな自分の思うようにやってたのー」

「それって、どのくらい前なんですか？」

「うーんとね、2、3週間くらいー」

「いー」

それを聞いた黒いのの眼がほんの少しだけ、視覚強化した私だから気がつくほど少しだけ、険しくなった。だがそれもすぐに消えて、もとの何も感情が無い眼に戻る。

……そういえばこいつ、眼に感情が浮かぶことって無いな。ふざけている時も、笑っている時も、怒っている時も眼だけは何も感情が浮かんでいない。唯一浮かぶのは私とあいつが対峙した時と、今日みたいに詰問（拷問か？）したときだけだな。

「師匠、もしかして何かまずいことでもあるんですか？」

「うっん、別に何もないわよ。ただ、ちょっと急がなきゃいけないかも。まあ、今日はもう移動するのは無理だと思っけど」

私は双子とリアに眼を向ける。何だかんだ言って、今日の強行移動は幼い体にはきつかったらしい。なんていったって、リアだってまだ12歳だしね。

「あ、そういえば、双子ちゃんは何歳なの？」

「12ですー」

「ですー」

嘘、このちびすけたちリアと同年か。この3人を並べてみると、リアって結構大きいほうだったんだな。私も黒いのもわりと背は高いほうだから、全然気がつかなかった。

「リア、良かったわね。貴方はもうチビじゃないわ」

「だからいつも言ってたじゃないですか！ 比べるものを間違えてたんですって！」

懐かしいな、トーマと一緒にリアをチビチビ言って追いかけてまわしたのが。

「とりあえず、今日はこの村に泊るわよ。黒いの、どうか適当に宿屋探してきて。汚いこと高いところは嫌よ！」

「相変わらず貴女は人に何か頼むときに限って注文が多いですよねえ」

そうブツブツ文句を言いながらも黒いのは宿屋を探しに行った。

あいつのことだから5分ほどでいい宿屋を見つけてくるだろう。匂いか？ 匂いで分かるのか？ 無駄にそんな能力がある黒いのであった。

「さてと、私たちは私たちが買い物しちゃうわよ」

「買い物？」

「物ー？」

「そうよ。あんたたちのその耳を隠す帽子とか、私たちについてくるならそれなりの服とか用意しなきゃいけないからね」

まだ日が完全に落ち切っていないから双子はちらちらと見られる

だけで済んでいるが、日が完全に落ちれば狼族のスパイだとか言つて村を叩き出されるだろう。いくら私たちがついていてもだ。そして数分後、リアとファイ、そして途中から合流した黒いのは地獄を見ることになる。

「見てみてファイ！ これ似あうんじゃない？」

「あ、それもカワイイのー！」

満面の笑みで露店を眺めて回る師匠とファイ。そしてその後ろを荷物を抱え、辟易した顔でついていく男性陣3人。しかし女性2人は気がつかない。

「セーラさん、この黒いのと緑の、どっちが似合いますかー？」

「うーん、ファイだったら緑かな？」

「じゃあ黄色にしますー！」

嬉しそうに緑色のマントを抱えて店主の元へと掛けていくファイ。やっぱり女の子だったんだな。

セーラというのは私の名前。10年前に捨てた名前の代わりに私が自分でつけた名前だ。もっともこの名前を読んでいるのは現時点でファイとファイの2人だけだが。

「あのー、師匠？ そろそろ必要な物はそろったんじゃないんですか？ そろそろ宿屋に……」

「そうね、じゃあ……」

私の言葉に無言で顔を輝かせる男3人。そんなに嫌だったのか、買い物が。その3人を見つめたままにやりと笑う。とたんに顔が凍りつく3人。

「じゃあ、今度は楽しいウィンドウショッピングと行きますか？」

「……」

「ホントですか？ やったー！」

無言で何かを諦めたような顔になる男3人と、両手を上げて無邪

気に喜ぶフィア。……でも、小さいフィイにこれ以上つき合わせるのは酷かな？

「でも、フィイは疲れたみたいだから黒いのと一緒に先に宿屋に行つてなさい。黒いの、宿屋の場所は？」

「ちよつと待つてください、師匠！ 僕は！？ 僕のフィイと同じ年なんですけど！ 僕もかなり疲れたんですけど」

「あんたは私があんだけ鍛えたんだから平気でしょ。荷物持ちになりなさい」

「鬼———！」

「フィアちゃんもいるんですから、あんまり遅くならないでくださいね。リア、頑張ってください」

最後に本当に嬉しそうな顔で久々に笑った黒いのが半分眠っているフィイをおんぶして先に宿屋へ向かった。

「さーて、今日はいっぱい買っぞー」

「おー！」

「やめてください！」

そしてその日、満面の笑みを浮かべた私とフィア、そして疲れ切った顔で両手に荷物を抱えたリアが宿屋に入っただのは日もすっかり落ちて、そろそろ黒いを探しに行こうかとしていたころだった。

女の子の楽しみ（後書き）

セーラ ↓ 青蘭

本当は蘭で”ら”とは読みませんが、片仮名にしたときセーランはちよつと……というわけで、セーラとさせていただきました。ちなみに何故師匠の二つ目の名前がセーラか分かりますか？ ヒントは元の名前です。

答えは次回のあとがきでも書きますかね。

追手（前書き）

暴力シーンはなるべくさらっと書いていきたいと思っています。一応これ、戦闘モノじゃないんで。（↑今更）
作者は暴力反対です。（↑じゃあ書くな）

追手

翌朝、まだ日が昇りきっていない時間に私は起きだした。軽く壁をコツコツと叩いてから一緒に寝ているフィアを起こす。

「フィア、起きなさい。そろそろ行くわよ」

「ふわぁ。おはようございます……って、まだお外真っ暗ですよー？」

まだ眠気が去っていないのか、少し舌つたらずなフィアが目をこすりながら抗議する。

「次の村がちょっと遠いから、少し早めに行くのよ。ほら、早く着替えて」

フィアを急かしながら支度を済ませ、まだ目をこすっているフィアを半ば引きずるように部屋を出る。

「遅いですよ。リアとフィイ君は先に村の出口に向かわせました。」

「ここは僕が交渉するので先に行っていてください」

「ありがと。さ、行くわよ、フィア」

宿屋を出ると、まだ眠いらしいフィアを背負って村の出口に向かって走り出す。……それにしてもこの子軽すぎじゃない？　今までちゃんとご飯食べてたのかしら。

村の出口近くの家の物陰に、膝を抱えて丸くなっているフィイと、その傍に立っているリアが見えた。やっぱりフィイのほうも眠かったらしい。

「あ、師匠。おはようございます。フィアちゃんもやっぱり駄目だったみたいです」

「まあ、まだ小さいから仕方ないわよ。もう少し寝かせてあげましょう」

「……僕も同い年なんですけど。ついでにもっと小さい頃叩き起されて目が覚めるまで虫とか持って追いかけまわされたんですけど」

「……あれは、うん、そう、訓練だから」

「まあ、おかげですぐに起きれるようになったのでいいですけど。主にトラウマで」

どうやら私は幼いころのリアの心にとてつもなく大きな傷跡を残していたようだ。ま、結果オーライ？

「よくないですよ。僕以降の子たちにそんなことしないでくださいよ。フィアちゃんとフィイにとか」

リアが私と双子の間に立ちふさがる。いい度胸してんじゃない。

「ふーん。僕以降……ね。じゃあ、リアはいいの？」

「え、ち、違っ！ そういう意味じゃなくて……！」

「いい加減貴女はリアをいじめるのやめてください」

「あら、黒いの。遅かったわね」

いつの間にか黒いのが呆れた顔で後ろに立っていた。黒いのにも気づかないなんて、私もちよつと度が過ぎたかしら。

「まったく貴女って人は。子供じゃないんですから、いい加減限度つてものを覚えてください」

「ったく。分かったわよ。相変わらずあんたは固いわね」

「誰のせいだと思ってるんですか、誰の」

「あー、何にも聞こえないー」

私は耳を押さえて顔を背ける。後ろで黒いのが貴女はガキですか、とか言ってるような気がするけど無視。

「じゃ、出発するわよ。黒いの、フィイを背負ってあげなさい。リアは全力で走れるわね。私はフィアを背負ってくから」

2人とも黙って首を縦に振ってこたえる。

私はフィアを背負うと、黒いのがフィイをきちんと背負ってスタンバイしているのを確認すると、指を3本立てて軽く振る。

腕を元に戻した瞬間から心の中でカウントを開始する。3……2

……1……。

0、と心の中でカウントするのと同時に地面を強く蹴って家の影から飛び出す。同じタイミングでリアと黒いのも飛び出しているはずだ。

ちゃんと付いてきているか気配だけで確認して前方に目を凝らす。
(10か。多いな)

走る速度は緩めないまま、腕を固定したまま指を1本立て、左右に10回振る。後ろの2人が同時にうなずくのが気配で分かる。

それを確認すると同時に、私はフィアを背負い直し、道のわきに続く森の中へ飛び込んだ。と同時にリアと黒いのもそれぞれ左右の森の中へと飛び込んだ。

「リア、あんたは黒いもののほうへ行きなさい。こっちは1人で大丈夫だから」

「分かりました」

私の後についてきたリアに一言だけ指示を出すと、私は目の前を凝視する。……こっちは女だと思って甘く見てるわね。4匹くらい軽いわ！

「——ッ！」

無言で気合いを入れて目の前に見えた1匹に飛び蹴りをお見舞いする。その間にも走る速度は落とさない。続く3匹も回し蹴りと飛び蹴りで沈める。

周りに残りがいないことを確認して道に戻る。遅れること数秒、黒いのもリアも道に戻ってきた。

「遅かったわね。あんたたちもまだまだね」

「うゝ、やっぱり師匠には敵わないです」

「それよりも黒いの、そっちはどうだった」

「貴女の読み通り、全員狼です。たぶん昨日の夜から街の外に張つてた奴らと同じです」

「で、宿にいた奴らは？」

「全員沈めて村の広場に置いてきました。朝になれば村の人たちが気がついて何とかしてくれるでしょう」

「……？」

私と黒いものの背中ではようやく起きたらしい双子が双方訳が分からない、といった顔できょとんとしていた。

「これは私の推測だけど、さっき沈めた奴らはあんたたちの次の作戦実行部隊よ。昨日の夜から村の外と宿屋に張ってたから早めに出てきたってわけ」

「多分この先、まだ追手は来ると考えたほうがいいでしょうね」

「仕方ないわよ。あいつは昔っからしつこい奴だったから」

小さいころの記憶なんてとくに捨てたくせに、とか何とか黒いのが言っていたような気がするが、たぶん気のせいだろう。

私たちはだんだん明るくなってきた道をただひたすら次の村を目指して駆けていた。

追手（後書き）

これは暴力ではありません。アクションです。きっと。
グロイシーンとかは絶対に書かないようにしているので、もし何か
気がついたことがあれば、感想をお願いします。

道の途中（前書き）

年下組は可哀想です。

道の途中

「そろそろいいかしらね」

そう言って私はフル回転させていた足をとめた。それにならってリアと黒いのも足を止める。

私はもちろん息ひとつ乱れていないが、黒いのとリアの息はかなり上がっていた。

「何よ、あんたたち。だらしないわね」

「ゼエ、ハア……。貴女は相変わらず化け物ですね……。フウ……」

黒いのの息はだいぶ整ってきたようだ。それに比べてリアは、

「ハア、ハア……。な、んで…フウ、ふた、りは……平気、何ですか……」

「男の子のくせにだらしないわね。特にリアは誰も背負ってないでしょ」

「だからって、8時間連続走破って、……フウ、ヒドイじゃないですか」

追手を振りきったのがだいたい午前3時くらいだから、今は日も高くまで昇り、もうすぐ昼時になる。

「ったく。帰ったらしごき直してやるわ」

「そんなあ」

私は止めていた足をまた動かし始めた。いつまでもこんなところで立ち止まっているわけにはいかない。

「だいぶ息も整ったでしょ。行くわよ。早くしないと日暮れ前に村につかない」

「それもそうですね。さ、リア、行きますよ」

「えっと、ミカゲ？ 僕降りて自分で歩くよー？」

ミカゲの背中であつぷりと眠っていたらしいフィイが元気いっぱいになったらしく、降りる降りると騒いでいる。

「だ、そうですよ。背中空くのでおんぶしてあげましょうか？ リ

ア」

「結構です!!」

明らかに楽しそうな顔をした黒いのと、顔を真っ赤にするリア。いちいちそんな反応をするからみんなに遊ばれるのだということにいい加減気づかないもんなのかな。

「フィイが降りるなら、私も降りますー」

フィアもそう言い出したので、降ろしてやった。

地面に着地すると、フィアは私に向かって深く頭を下げた。

「セーラさん、ありがとうございます、でしたー」

「いいのよ、お礼なんて。それにフィアはすっごく軽かったから全然辛くなかったよ」

「でも、ありがとう、なんです。フィイもお礼言った?」

「ミカゲさん、ありがとうございます」

「僕もお礼なんて要りませんよ。年上としては当然のことですから」
「年上なら、当然、ですか……」

リアが珍しく拗ねている。1人だけそっぽ向いている。顔を90度とちよつとくらいひねって歩いてるのによく転ばないな。

「あ、つぶな」

あ、転びかけた。でもさすがの運動神経でリアは転ぶ直前に体勢を立て直した。さすが私が鍛えただけあって体のバランス感覚と反射神経は素晴らしいわね。

「リアの課題はあと体力かあ。また追いかけます?」

「遠慮します。体力はしょうがないですよ。僕はまだ成長期ですから」

「あれ、僕がリアくらいのときはもう12時間連続走破とか余裕でしたよ」

「ああ、そうだったわね。黒いのは昔から武芸に関しては天才だったわ」

「まあ、そうは言っても貴女に敵ったことは結局1度もありませんでしたけどね」

黒いのに関しては確かに私が教え始めたころからもう天才的だった。ほんの数カ月でトーマと並んでしまったほどだ。でもトーマもそこら辺にいるようなレベルではないので、黒い相手に引けを取ったことは1度もないが。

「リアは帰ったら1日50キロ走ること。帰ればしばらく私も道場に入れると思うからチビたちの相手は私がするわ。……あ、トーマに任せてもいいのか。どっちにしろあんたは自分の修行に専念しなさい」

「5、50キロ……。分かりました」

今までリアは連続走破30キロまでしかしたことがない。いきなりハードルが上がってビビってるんだろう。

「なあに、ビビってんの？」

「そ、そんなことないですよ」

「ね、セーラさん、道場ってなんですか？」

「かー？」

どうやら双子を放っておいて3人だけで盛り上がってしまったらしい。反省反省。

「道場っていうのはね、私が武道を教えるところよ。こつ見えても私、師匠なのよ」

自慢げに耳をぴくぴくと動かした。

双子は目をキラキラと輝かせて喰いついてきた。

「セーラさん、オシシヨー様なんですね！」

「強いんだー！」

「フィアたちも教わりたいですよー！」

「すー！」

私はあごに手を添えて考える。確かに今は私たちが守ってあげられているけど、これから先ずっと守っていられるとは限らない。自分の身は自分で守れることにしたことは無いだろう。

「分かったわ。これから先何が起こるか分からないし、自分の身くらい守れたほうがいいわよね」

「やったー！」

「たー！」

私の周りをぴょんぴょん跳ねながら喜びを表す2人。その2人をリアと黒いのの2人が微笑ましげに見ていた。……リア、お前は同い年だろう。

「そうね、でもあんまり時間はないし、村の外で教えるのは今はちよつと危険ね」

「なら、各村で一泊ずつして、1日ずつ教えればいいじゃないですか。1日は移動、もう1日は稽古。それでどうですか？」

「ナイスアイディアよ、黒いの。双子もそれでいい？」

「「らじゃーです！」」

双子が可愛らしくそろって敬礼する。

こうやって並べてみると、この双子がすつごく似ていることに気がつく。もしかしたら、ファイアが髪切つて短くなったらどちらがファイアでファイイなのか分からないかもしれない。

「そうと決まれば、次の村まで走るわよー！」

「え、また走るんですか！？」

情けない声を上げるリアは無視して私と黒いのはそれぞれファイアとファイイを抱き上げる。

2人で目配せしてほぼ同時に走り始める。

「そんな、ちよつと待ってくださいよ。ミカゲさん、師匠ったら！」
足は早いが持久力がないリア君は、結局1人だけ村に遅れて着きましたとさ。

道の途中（後書き）

誤字脱字、または文章の流れ的におかしい、前までと言葉遣い、呼び方が違う（今まで僕だったのに俺になっている）など、何か気づいた点がありましたら、お知らせください。

作者もたまに読み返して見つけ次第直していますが、1人じゃ限界があります（泣

皆様のご協力、お願いします

素直な気持ち（前書き）

たぶんこの辺で折り返し地点かな、なんて思っています。
師匠たちは何処まで行くんでしょうかね。

素直な気持ち

「遅いわよ、リア」

結局リアが街に着いたのは日も暮れかかったところだった。手を膝について方を大きく上下させ、必死に息を整えているリアは、顔を上げるのもしんどいらしく下に向けたまま反論した。

「し、師匠たちが早すぎるんですよ何時着いたんですか」

「そうね、お昼ごろかしら」

「早っ!？」

リアが一瞬呼吸するのも忘れて驚きの声を上げた。当然、直後にむせたように咳を繰り返す。息乱したまま呼吸止めて声上げるからだぞ。

「大丈夫ですか？ちゃんと持久力つけないきゃだめですよ」

腹を抱えて笑っているだけの私とは違って、黒いのはリアの背中をさすってやりながら言う。

「うう、頑張ります……」

「……何よ、リア。黒いのが相手だと随分と素直じゃない」

「人柄、の問題でしょうか？」

「黒いのは黙ってなさい!!」

睨みつける私と平然とその視線を受ける黒いの。

「喧嘩はダメですー」

「すー」

と双子に割り込まれた。とたんに私の相好は崩れる。こんな可愛い子たちを間に挟んで喧嘩なんかできるわけじゃないじゃない。

「……貴女は相変わらず子供好きですねえ」

黒いのにため息をつかれるが無視。可愛いものは可愛いのだ！

「とりあえず、リアが来る前に黒いのが宿見つけてくれたから、そっちに移動しましょう。入口で騒いで悪目立ちするのもあんまり良くないしね」

というわけで、私たちは一斉にぞろぞろと宿屋へと移動する。そのほうが目立つって？ そんなの知らないわよ。

黒いのが見つけてきた宿屋はそこそこ大きくて、さまざまなネコが入り乱れている。

一番の魅力はその庭で、かなりの大きさを有している。これだけの広さがあれば、早朝でも他のネコにあんまり迷惑をかけずにチビたちの修行ができるわ。

双子は着いた途端、目を輝かせて庭へと走り去って行った。それを微笑ましげな顔で見送る3人。

「あら、リアは一緒に行かなくていいの？」

「こんなときだけ同じ年齢で扱うのはやめてくださいー!!」

「遠慮しなくてもいいんですよ、リア。そのためにこの宿を探したんですから」

「ミカゲさんまで!？」

すっかり落ち込んでしまったリアをその場に置いて、私たちは宿屋の中へと入って行く。

入口のところでふと思いたって、振り返る。

「リア、双子の面倒よろしくね！」

「えー!？」

さらに拗ねてしまったリアを黒いのと2人でニヤニヤしながら眺める。お前も相変わらず意地が悪いな。

宿屋に入り、黒いのが確保した庭に面した部屋へ移動する。窓を開けて外の様子をうかがうと、ちょうど双子がリアに駆け寄って行くところが見えた。

何だかんだ言って、リアも同い年の子供が旅に加わって嬉しいのだろう、笑顔で双子を迎えていた。

「目の保養だわ」

「貴女は何を気持ちの悪いこと言っているんですか」

「気持ち悪いとは失礼ね。事実じゃない」

「……………（ハア）」

何か思いつきり軽蔑の目を向けられたけど、気にしない。私は強い子！

「とりあえず、今後のことだけ確認しましょうか」

黒いのが私の正面に回り込んで座った。その真剣無顔を見て私の表情も自然と引き締まる。

「とりあえず、報告を先に。リアが遅れた理由は貴女も分かっていますね？」

黒いのの問いかけに、私は即座に首を縦に振る。

いくら体力がないとはいえ、リアは私の弟子だ。半日近くも送れるわけがない。

ならなぜ遅れたのか。理由は簡単。襲われたのだ。

時間的には私たちがちょうど村に着いたところ。私の目にはぼつちり見えていた。この目ってけっこう便利よね。

「多分そいつらが狼の第3部隊と考えていいでしょう。匂いではすでに村に第4部隊が紛れ込んでます」

「あいつもだいたい本気ね。ここまでしつこいと逆にあきれるわ」

「で、あの3人はどうするんですか？ まさか最後までは連れていきませんよね」

「……そのつもりだけど」

「貴女つて人は……！」

思いつきり黒いのにため息をつかれた。

「貴女はあの人にリアたちを会わせるつもりですか！？ あんな危険な人に！」

「落ちつけ、黒いの。会わせるとは言っていない。そのために黒いの、お前を連れてきてる」

「僕を？ ……まさか！？」

「あいつには私1人で会いに行く。3人を頼んだわよ。リアもいるし、あんと2人でなら私が戻るまで双子を守れるでしょ」

「それはダメです！」

めったに言葉を荒げるところか興奮することが無い黒いのが、珍

しく興奮している。というか初めてみたぞ。

「何のために僕が貴女についてきたと思ってるんですか。少しくらいは僕を頼ってください」

「十分頼ってるわよ。信頼してなきゃあの3人を任せるなんてできないわ」

まだ何かを言いたそうな黒いのを目で制して、私は視線を外に向ける。あの子は耳がいいから全部聞こえちゃったかな？

「東の森まではあと5日で行くわ。次の村で一緒にいるのは最後よ。その村であの子たちを守ってちょうだい」

黙っている黒いのの肩に手を伸ばし、ポンポンと軽く2回たたき。そして立ち上がると私は外に向かった。

「絶対に、帰ってきてください」

すれ違いざまに軽く服の裾を引っ張って、黒いのが小さく囁いた。それに私は軽く微笑んで応えると、そのまま外に出た。

「当然よ」

たまには可愛いこともするのね、なんてことを考えながら、笑みを抑えきることができていない頬を手で押さえながら、私はチビたちを呼び戻すため、日も落ちてだいぶ暗くなった外へと足を踏み出した。

素直な気持ち（後書き）

なんか、フラグたちました。

師匠は大丈夫なんだろうかね。作者にも分かりません。

そろそろお兄さんのほうも本格的に動き出す頃でしょうか。

修行と驚き（前書き）

双子ちゃんの意外な一面。

作者もびつくりしました。何故そんなものを隠し持ってた！？
リア君は安定の可哀想なポジションです。

修行と驚き

翌日の朝、宿の庭からは元気な声が聞こえてきていた。

「うわぁ！　すごいですー！」

「すー！」

歓声を上げているのは双子のフィアとフィィ。そして元気に悲鳴を上げているのが、

「師匠！　何で僕まで！？　ちょっとは手加減……って、うわー！」
リアだった。

「何よ、リア。私はまだまだ本気なんか出してないわよ。ほら、頑張らないと双子ちゃんに呆れられちゃうわよ」

「そんなこと言ってたって！　っと、ハッ！」

リアが気合いと同時に右足の低い蹴りを入れてきた。私はギリギリのところまで一歩下がってスルリとかわす。先ほどから攻撃がかすりもしないことに、早くもリアは涙目になってきている。

「ほーら、リア。さっきから一度も当たってないわよ。よく私の動きを見なさい」

「もう！　いじめですよ、これ！」

今度は左から回し蹴り。これも軽くステップを踏んだだけでかわす。

「もうやだ」

すっかり戦意を喪失してしまったリアは、動きを止めてしまう。

そのままその場にしゃがみこんでのの字を書き始める。

「じゃ、次は双子ちゃん達もやってみましょうか。さっきのリアみたいにならなくてもいいから、とりあえずフィアは私、フィィは黒いのと組み手にしましょうか」

「え、僕もですか？　貴女一人で十分対応できますよね」

「あんた師範代から逃げたでしょ。その代わりだと思ってやっとなさい。それとも何、私と組み手がやりたいのかしら？」

「謹んでご遠慮させていただきます」

素直でよろしい。

早速私とフィアは向き合うつと、一礼した。これはマナーね。

「じゃ、どこからでもいいわよ。うまくやろうとしなくていいから」
「はいです！　じゃあ、遠慮なくいきますー」

と、フィアがそういうと同時に腰を低くすると、思いつきり地面をけた。結構なスピードで突っ込んでくる。……これは真剣に相手しないとどっちかが怪我する。

隣の様子を見ると、フィイも同じようなもので、若干表情を引き締めている黒いのが見えた。

「ねえ、フィア？　もしかしてどっかで格闘技とか習ってた？」

「うんと、そうですね。この前の作戦に参加する2週間前くらいに一通り教わりましたー」

「ましたー」

律儀に反応するフィイ。双子パワー、恐るべし。……にしても2週間でこのレベルか。この子たち、実は天才なんじゃないの？

そんなことを考えながら相手をしていると、先ほどまでうずくまっていたリアが急に立ち上がって、すたすたと宿の中に入っていた。

「ちょっと水飲みに行ってきますね」

入り口のドアからひよっこり顔だけ出してそういうと、今度こそ中へと消えた。

「あの子は耳いいからね」

「まったく、本当にそうですよ」

リアのように周りの音が鮮明に聞き取ることができない分、私と黒いのは気配を読む力を鍛えている。中には気配を消すことができる人もいる（例：師匠）ので万能というわけではないが、だいたいの人数、種族程度なら分かる。

「どうします？　中断しますか？」

フィイの蹴りを受け流しながら黒いのが訪ねてくる。

「うーん、リア一人でも大丈夫じゃない？」

私もフィアの蹴りからの裏拳を身をよじってかわしながら答える。
「よし、終わりー!!」

私の合図で動きをピタリと止めるフィアとフィィ。その様子を見て私の背中に嫌な汗が流れる。

2人は私たちと出会う前に2週間だけ訓練を受けたと言った。しかし、そんな短い期間で動きをピタリと止められるようになるのはほばありえない。だいたいこの年の子供というのは、合図があっても夢中になっていたりして動きを止められないものだ。現にリアでも止められるようになるまで1ヶ月はかかった。

それをたった半分の2週間で。

動きのほうも半端ではない。少なくとも1年は毎日休まず稽古を続けなければならぬだろう。

「……あんたは一体どんな子供を仕込んでんのよ」

私の呟きが少し聞こえたらしく、フィアが不思議そうな顔で私を見上げてくる。そのフィアに何でもないよ、というように軽く首を横に振ってみせ、宿のほうへと視線を向ける。ちょうどリアが戻ってくるころだった。

「遅いわよ。いったいどれだけ水飲んできたのよ」

「すいません。思ったより多くコップに注いじゃって、飲みきるのに時間がかっちゃいました」

「ちゃんと後片付けしてきた？」

「はい。それはきちんと」

上出来だ。やっぱり弟子が優秀だと師匠は楽でいいわ。鍛えた甲斐があつたわね。

「じゃ、双子ちゃんの実力も分かったことだし、今日の稽古はここまでにしましょうか」

「えー、なんか師匠、フィィとフィアには甘くないですか」

「この子たちにはこれ以上訓練は必要ないわよ。それとも私の判断には不満？」

「そういうわけじゃないですけど」

「なら黙ってなさい」

嫌な汗をかくほどの実力だったのは秘密だ。これならこの先私がいなくてもリアと黒いのの足を引っ張ることはないだろう。

「そうと決まったら今日は一日ゆっくり休んで、明日には出発するわよ。リア、黒いの。あんたらは何とかして稼いできなさい」

「またですか……」

「……………」

いくら節約しようとも、宿やら食べ物やらで金は必要になってくる。さらに今回は人数も増えているので、今のうちに稼いでおいたほうがいいだろう。ちなみに私は何もしない。弟子任せ。

しぶしぶ宿を出ていくリアと黒いのを見送って、私は部屋のベッドにダイブする。稽古つけた後のこのベッドがたまらなく気持ちいいんだあ。

ちらりと脇を見ると、同じように双子ちゃんもダイブしている。

うん、そうだね。気持ちいいよね。

今日は朝早くから起きていたせいか、しばらく見守っていると双子ちゃんはすやすやと眠り始めた。私も規則正しい寝息を聞きながら、いつの間にか眠ってしまっていたらしい。

夕方に帰ってきたらしいリアと黒いのに大量の殺気を浴びさせられ、飛び起きたのはまた別の話。

修行と驚き（後書き）

次回、突入！！

え、しない？　しないの？

師匠「だってめんどいもん」

話進まないから！！　お願いします。動いてください。

……それと、リアの「水飲んでくる」の意味、分かりました？　分かりましたよね。水⇓敵、飲む⇓倒すです。分

前夜

翌朝、まだ日が昇りきっていない時間に動く5つの影があった。もちろん、私たちだ。

「今日はちよつと遠いけど、今日中に隣村まで行くわよ。いいわね」
一斉にうなずく4人。それを確認すると、私は隣村に向かって走り出す。

隣村に着いたところにはもう日が沈みかけていた。道中特に襲撃もなく、逆に私たちは警戒が強くなっていた。

「ったく、あいつも相変わらず酷い心理戦しかけてくるわよね」

「本当にそうですね。ここまで警戒して何もないと、精神的疲労もかなりのものになりますし」

あいつを知らないリアと双子はキョトンとしている。

「ま、何もないわけがないんだけどね。たぶんあいつはこの森にいるはずだから」

「その、あいつ、というのは師匠の何なんですか？」

リアがちよつと聞きにくそうに尋ねてきた。

「……兄よ。認めたくはないけど」

「師匠の、お兄さん……？」

初めて聞いたリアはとても驚いた。そもそも私に兄がいたことすら知らないのだ。当然の反応だろう。

双子もかなり驚いたらしく、フリーズしている。まさか自分たちに襲うように指示したトップが、自分たちが襲った人の兄だったとは思ひもなかっただろう。

「ま、誰であろうと近日中にけりをつけるわ。距離的にも近いわけだしね」

「……師匠。絶対に、1人で行こうとかしないでくださいね」

「……………」

「……ハア。やっぱり。僕も何年弟子をやっているとってんですか。それくらい分かります」

何でこう私の弟子たちはそろいもそろってこう察しがいいのかしら。ちよつと鍛えすぎ？ でもこればかりは譲れない。リアたちが私を一人で行かせたくない、と思うように、私もリアたちを連れていきたくないという思いがあるからだ。

「あんたちは連れて行けない。ここに残ってなさい」

「何ですか！？ 僕たちはそんなにも足手まといですか！？」

「そうじゃない！！」

珍しく怒鳴った私に、一瞬、部屋が静かになる。ハツとして4人の顔を見ると、そこには今にも泣きそうな顔をしたリア、ただ静かに私の言葉を待つ黒いの、訳が分からないなりに心配そうな顔をするフィアとフィイがいた。

「嫌なのよ。自分の面倒事に他人を巻き込むのが。10年前につけきれなかった決着のせいで誰かが傷つくのなんて、見たくない」

「師匠……」

「分かったら私を1人で行かせて。もうこれ以上私のせいで傷つく人は見たくない」

私の両親のように、誰かを死なせたくはない。これ以上、兄に人を殺めさせたくない。それが唯一残された肉親に、唯一私ができることだから。

「黒いの、リア。フィアとフィイを頼むわよ」

まだ泣きそうな顔をしていたが、リアはもう何も言わず、しっかりとうなずいた。黒いのも同様にうなずく。

私はしゃがみこんでフィアとフィイに視線を合わせると、ゆつくりと語りかけた。

「私が面倒みるって言ったのに、こんなところで放り出してごめん。でもちゃんと戻ってくるから。それまであの2人と一緒にいてくれ

る？」

「私、セーラさんのこと、ずっと待ってますー」

「僕もー」

「うん。ありがとう」

双子がにっこりと笑うのを見て、私は立ち上がる。

「さすがに夜から森に入るのは危険だから、明日日が昇ったら入るわ。それまでに買い物済ませちゃうわよ！」

「また買い物ですか」

そう言っただけでリアが笑った。その目元に光るものが見えたが、私は見なかったふりをした。

「そうよ。昨日リアと黒いのが稼いでくれたから、久々に甘いものでも買っちゃおうかしら」

「甘いものですか!？」

すかさず反応したのはフィアで、こんなところは女同士通じ合うものがある。

「よし、行くわよ!」

「おー!」

「おー!」

私の掛け声に元気よく応えたのはフィアとフィィ。リアと黒いのはやれやれ、といった風に私たちに見ていた。

明日、単身森に乗り込む。そのことを考えると気が重くなるが、努めて明るくふるまった。

「……大分遠くまで来ちゃったな。まったく、誰かさんのせいで楽しい旅も、かたっ苦しいことこの上ないわ」

小さく愚痴っていると、目ざとい黒いのが視線だけで問いかけてきた。私はそれに首をすくめて答えると、さっそく街へと繰り出していった。

再会と初対面（前書き）

お兄ちゃん、登場！

そして、師匠突入！

師「お兄ちゃん、その女誰！？」
ひと

兄「すまない、俺はこいつが好……」「続きはWEBで」
「」

……嘘です。

再会と初対面

太陽が昇りかけるころ、私は一人ごそごとベッドを抜け出す。着替えを手早く済ませて持ち物を確認する。

一通り準備を済ませた後、最後の仕上げとばかりに10年前にもらった短剣を腰に差す。10年前の決着をつけるなら、これは必要不可欠なものだろう。

「じゃ、行つてきます」

一緒の部屋で寝ていたファイアの頭をなでる。ぐっすりと眠ったファイアは起きる気配もない。

私はその様子にくすりと笑うと、静かにドアを開けて部屋を出る。随分と早いわね？」

「大丈夫です、ひきとめたりはしません。ただのお見送りです」

「師匠、気をつけてくださいね」

ドアを開けると、そこには黒いのとリアがいた。黒いのは笑顔で、リアは半分涙目で、それぞれお見送りの言葉を言ってくれる。

私は二人の頭をそれぞれガシガシとやると、黒いのは少し迷惑そうな顔、リアは嬉しそうな顔をする。

「無事に帰ってくるから、チビたちを頼むわよ！ あ、リアもチビだったか」

「チビは余計です!!」

そこは間髪いれずに噛みついてくるか。よしよし、元気だな。

「うし、じゃあ行ってくるわ。あとよろしくね」

そう言って、私は宿屋を出た。

……あ、ファイの顔見てくるの忘れた。

「……何なの、この禍々しい気配は。一体何が巢食ってるっていう

のよ」

私は必死に以前ここを訪れたころの様子を思い出していた。見た目は変わらない。それは断言できる。けれどそこに渦巻く空気というものが酷く濁っていた。

「これじゃあ、何にも住めないわね」

鳥や虫たちも逃げ出してしまったのか、辺りには時々風が木々の葉を揺らす音しか聞こえない。つまり、無音。

「入りたくない……」

けれど入らなくては何も始まらないので、嫌々森の中へと足を進める。

枝を踏んだり揺らしては笑えないので、慎重に足を進めていく。ここは森の中だから気をつけなきゃいけないものはいっぱいあって、すぐく神経が疲れる。

森に入ってから3時間も経っただろうか、前方に広場のようなものが見えてきた。その手前50mほどのところで立ち止まる。私はそのくらい遠くても余裕で見える。目がいいからね。

「あれは、あいつ？ その傍にるのは……」

広場の一番奥、土が一段盛り上がったところに、あいつ、兄と見たことがない女の人がいた。

広場のこちら側には一目で狼族と分かる者たちが適当に座ってくつろいでいるのが見えた。普段群れることがなく、一目で”黒ネコ族”と分かるあいつが目の前にいるのにくつろいでいるその光景が、私にはとてもおかしなものに見えた。

私がじつと観察していると、ふとあいつが立ちあがって狼族のやつらに声をかけ始めた。……ばれたか？

私が冷や汗をかきながら一層息をひそめていると、あいつはどうやら狼族の奴らを並べているみたいだった。しかし、普段群れない奴らがよくこんなにもきれいに整列できるもんだな。

あいつは狼族を、真ん中に通路を作るかのように広めに間を開けて並べさせると、自分はまた奥の女の人の背後に控えるように立つ

た。

「さて、みなさん。今日はいい天気ですね」

急に女の人が喋りだした。その声は50m離れている私にもはっきりと聞き取れるほどよく通り、高すぎず、低すぎない聞いていてとても心地いい声だった。

しかし、あの人は一体誰なんだろう。パツと見た感じ、ネコでも狼でもない。初めてみるタイプだ。

その時私は気付いていなかった。その女の人の目が、はつきりと私を捉えていたことに。

「今日はですね、うふふ。いい天気の日にはぴったりの、素敵なお客様が来てますよ」

「え」

気がつくと、私はその広場にいる全員と目が合ってしまった。

「あ、あはは。どうも、こんにちは」

もう笑うしかない。あいつが近づいてくるのをただ呆然とその場で見ていた。逃げようにも足が動かない。

「彼女は彼の妹さんなんですよ」

私が女の人の隣に連れてこられると、そう紹介された。彼とはあいつのことだろう。

一斉に集まる好奇の視線。隣を見ると無表情のあいつがいた。

「じゃ、あたしの目標は達成されたので、しばらくは用はありません。帰っていいですよ」

女の人のその言葉に、素直に立ち去っていく狼族たち。何者なんだ、この人は。

狼族が全員立ち去ると、女の人は私に向き直って改めて口を開いた。

「改めまして。初めまして、カランさん。あ、今はセーラさんでしたっけ？ あたしはルーパス」

「ルーパス……？」

どこかで聞いたことのあるような名前だった。一体どこで？ 思

い出せ、今すぐ思い出せ！

「多分、族長の書斎の本であたしの名前を見たんじゃないかしら？
リュウセイもそこで知った、って言うてましたし」

私の表情からよんだのか、さらりとループスさんが答えを教えてくれた。って、何私はほのぼのと会話してんだ！？

「まあ、すぐに気がつかないのはしょうがないですよ。もともと男の名前ですし。ね、リュウセイ」

黙ってうなずくあいつ。こいつってこんなに無口な奴だったわけ？
つい1週間ほど前に会ったときとは大違いの口数の少なさだ。
やばい、こいつをのしに来たのにだんだん心配になってきた……。

「彼の心配よりも、自分の心配をしたほうがいいんじゃないですか？」

「自分の心配って……きゃっ」

見事にループスさんに足払いをきめられて地面に倒れこむと同時に、上から押さえつけられる。のんびりと会話していた私がうかつだった。

「敵地のど真ん中で油断なんかしてちゃダメですよ？」

……ごもつともです。私はどうやってこの状況から切り抜けようか、必死で頭を働かせていた。が、次にループスさんの口から出てきた言葉に、私はそのまま固まった。

「その身体、お借りしますね？」

再会と初対面（後書き）

ルーパー何者！？

次回、過去の裏話。

真実（前書き）

いける。いけると思ってたんだよね（泣
これを読んでくださった友人の皆様が、

「これはなぜ残酷描写の警告が無い!？」」

と寄ってたかって苛めるんです（笑

さすがにこの回からはアウトだろうという作者の自己判断（自重ともいう）により今回から残酷描写ありの警告を入れさせていただきました。

内容的にはほぼ変わりません（たぶん）ので今まで同様楽しんでいただけると幸いです」

真実

「身体を……借りる？」

「そうよ。あたし、こう見えても霊体なんですよ？　それで、このリュウセイに協力してもらっているわけです」

この目の前でしっかりと実態を持っている人が霊体？　そんなわけあるはずが……

「カラン、俺が1週間前に言ったこと、覚えてるか？」

今までずっと黙っていたあいつが急に口を開いた。1週間前……、北の森であいつに会った時か？　確か強くなった私が必要とかどうとか言ってたな。

「始まりは10年前。俺がこの人に出会ったときからだ」

そう言つて、あいつが静かに語りだしたのは、10年と少し前。私の7歳の儀式の前の出来事だった。

「坊や、どうしてここに來たの？」

「何か嫌な気配を感じた。あんたが僕の父上や母上、妹や族民たちを傷つけるような奴だったら容赦はしない」

僕はそう言つて3年ほど前に父上から頂いた短剣を構えた。本来この短剣は人を殺めるためのものではないが、まだ幼い僕にはこれしかなかった。

「あらあら、坊やはあたし相手に随分と気が強いだね。気にいったわ」

「僕はお前に気にいられる筋合いなど無い！」

「うふふ。200年ぶりだから、坊やみたいに小さい子があたしのこと知らなくても当たり前ね。もっともあたし、200年前は男だったけど」

突然、目の前にいる女が怖くなった。200年前。以前は男。その単語が頭の中でぐるぐるする。どこか、どこかで僕はその単語を目にしている。その正体を知っている。

「あら、坊やは頭もいいみたいね。あたし、賢い子は好きよ」

目の前にいるのは何の武装もしていない、非力な女のはずで、僕のほうは短剣を持っている。それなのに僕はこの女の目の前に立っていることにすら恐怖を覚える。

「いい、坊や。あたしの名前はルーパー。 ” 神狼ルーパー ” よ」

「あ……」

思い出した。 ” 神狼ルーパー ”。それは狼族の存在する神であり、もつとも残酷で残酷な神。その身体は200年前にこの北の森の ” 母なる洞窟 ” に封印されたと、父上の書斎にあった本には書かれていた。

「ちよつとごめんなさい」

すぐ近くでしたその声にハッとして意識を前に戻すと、至近距離にルーパーの顔が見えた。

「痛っ——！」

一瞬痛みが走った右腕を見ると、一本の赤い傷が手首から肘のあたりまで走っていた。また視線を前に戻すと、そこには赤い液体を手につけ、それを舐めとっているルーパーがいた。

「お前、族長の息子か……！ ついさっき目覚めたばかりだと言うのに、なんて運がいいんでしょう！ お前、名は何と言う？」

「……リュウセイ」

「うふふ、いい子ね」

ルーパーはもう一度僕に、今度はゆっくり近づくと、頭を優しく撫でた。頭が撫でられたところからぼーっとする。

「そう、明日妹の7歳の儀式なの。それで、あの洞窟で儀式を行うのね。そこには族長たちも揃う……」

何でそんなこと、この人が知っているんだらう。そう思っていたら、急に僕の声が聞こえてびっくりした。どうやら僕が全て喋って

しまつたらしい。

「いい、リュウセイ。貴方はもうあたしのもの。あたしの言うことしか聞かない」

僕、何かいけないこと喋っちゃったような気がする。でもさつきから頭がぼーっとして、ルーパスが何言っているのかもよく分からない。

「リュウセイ、よく聞いて。あたしはここに200年も閉じ込めた貴方の先祖が憎い。できれば復讐したいわ。でもね、今のあたしにはそれができないの。何でか分かる？」

父上、母上、カラン。ごめんなさい。

「あたしが力を発揮するためにはこの族長の存在が邪魔なの。いくらこの200年で族長の力が衰えたといっても、200年前にあたしを封印した者の末裔だから。だからね……」

もう眠い。このままここで寝たら、僕はこの人に殺されちゃうのかな。

—— 貴方の家族を全員殺しなさい ——

カランだけは守らなくちゃ。僕の大切な妹。

そこで僕の意識は途切れた。

真実（後書き）

お兄ちゃん、そんな過去があつたなんて……！
これからお兄ちゃん大活躍（の予定）です
頑張れお兄ちゃん！

愛憎

「何よそれ、聞いてないわ。そんな、じゃあ私が今まで生きてこれたのは……」

「そ。貴女のお兄さんのおかげですよ」

その言葉は私の10年間持ち続けたあいつへの恨みを否定するもの。私の存在の根底にあるものを否定するもの。

「1番憎いと思ってた奴に私は生かされてたの？」

屈辱。

この2文字だけが私の頭に浮かんた。まさか自分がいつか倒すと息巻いていた奴に生かされていたなんて思いもしない。私の10年分の恨みはどこへ向ければいいの？

「……あの時私も一緒に殺してくればよかったのに！」

そうすればこんなに辛い思いをしなくても済んだ。10年もかけてやっと唯一の肉親を倒す決意が固まったのに、その決意を簡単に粉々にされ無くて済んだ。

混乱する私を、あいつはただ淡々と、だけどこか悲しそうに黙って見つめ続けた。

「そんなこと言わないであげてください。リュウセイは私の暗示を自力で解いてまで貴女を救ったんですよ？　いくら力が本調子に戻っていなかったとはいえ」

「暗示？　自力で？　……兄様、それはどういう意味ですか？」

「……やつと昔と同じように呼んでくれたな。意味はそのまんまの意味だよ」

私はハッとして口元を押さえた。混乱しすぎて昔の呼び名が出てしまったらしい。羞恥で頬が赤く染まる。

そんな私をルーパスさんはニヤニヤと、あいつは少しだけ嬉しそ

うに見つめていた。

「兄妹仲よろしく話しているところで悪いのですが、あたしの話もしていいですか？」

ルーパーさんのその一言であいつが黙る。必然的に私も黙ることになる。ちよつと癪に障るが。

「ホントは身体を借りるだけならリュウセイでもよかつたんですけど、今あたしは女性の姿をとっているわけです。男性の身体って合わないんですね。この前もちよつとリュウセイで試してみたんですけど、結局リュウセイの身体のほうがもたなくて……」

そこでルーパーさんが私に体重をさらにかけた。思わず息が詰まる。

ルーパーさんが私の顎を掴み、無理やり自分のほうを向かせる。私と目が合うと不気味に笑った。私の背中にゾクリと悪寒が走る。

「受け入れる。あたしの存在を。あたしの意志に服従を誓い、その身体を差し出せ」

決して脅している口調ではない。ただ淡々と用件を述べている。それだけのはずなのに、思わず自分の全てを投げ出してしまいたくなるような、鋭い威圧感。

この時初めて私は、相手は自分では到底及びもしない存在なのだと思い知った。

「……これくらいにしておいてください」

意外にもルーパーさんを止めてたのはリュウセイだった。

「これ以上はカランの身体がもちません。折角見つけたものを早々に壊すつもりですか」

「それもそうですね。ではまた今度にします。気をつけてお帰りください」

そう言つてルーパーさんはあつさりと私から身体を離すと、そのままどこかへ消えてしまった。

私があつけにとられてその後ろ姿を見つめていると、リュウセイもその後へとついていった。

「兄様！」

私がそう呼び掛けると、リュウセイはその場に立ち止まって、ゆっくりと振り返った。その顔は何も感情を映しておらず、私はその顔に寒気を感じた。

震えだしそうになる身体を叱咤し、身体を起こしながら私は問うた。

「兄様、私はもう1度あなたに近づいてもいいの？」

すると、リュウセイは少しも悩んだそぶりを見せずに口を開いた。「否」

それだけ言つて、リュウセイは私に背を向けた。私は黙つてその背を見送った。

私の視界から消える直前、リュウセイは振り向きもしないまま言つた。

「例え操られていたとしても、俺はお前の両親を殺したことは変わらない。お前しか救えなかった俺をお前だけは憎み続けてくれ」

そしてリュウセイは私の視界から完全に消えた。

「これ以上、兄様を恨むことなんてできないよ……」

リュウセイが私のことだけは守ろうとしてくれたこと。その事実を知った今ではもうリュウセイを恨むことはできない。彼が純粹な殺戮衝動だけで両親を殺したと思ひこんでいたからこそ、肉親であり、大好きだった兄を恨み続けることができた。

あふれ出てくる涙を抑えることができない。

私は10年ぶりに声を出して泣いた。

10年間我慢し続けた思いが、あとからもあとからもあふれ続ける。

恨み。悲しみ。憎しみ。後悔。怒り。そして愛。

これらの全てがごちゃまぜになって、涙となり、あふれ出す。

「父様、母様、兄様……」

ようやく涙が止まったのはもうすっかり日が落ちて真っ暗になったころだった。

震える足を叱りつけて、なんとか広場をあとにする。

「何で来てるのよ」

森の入口には仏頂面の黒いのと、今にも泣きそうなりアがいた。

「師匠、あんまり帰りが遅いから心配で……。師匠、泣いたんですか……？」

「私のことはいいの！ それよりフィアとフィイはどうしたのよ」

「ちゃんと寝かしつけてから来ました。貴女との約束は守りましたから、これからは僕個人の勝手です」

「あんたたち……」

口ではそう言いながらも、嬉しい気持ちが抑えられない。私には10年かけて見つけた仲間がいる。

「何があつたのかは聞きません。今見たことも無かつたことにします」

「……あんた生意気よ」

私は最初に一応そう言ってから、黒いのの肩に顔をうずめる。黒いのは私を優しく抱きしめてくれた。

「今日は何もなかったことにします。だから師匠も明日からまたいつもの師匠になってください」

リアはそう言って私の背中を優しく撫でた。

もう枯れたと思っていた涙が、あとからあとからあふれ出してくる。私はどこか冷静になった頭の片隅で、そのことに驚いていた。

「さ、待つてる人いますし、早く帰りましょう」

私の涙が止まる頃合いを見計らって、黒いのが、いや、ミカゲが声をかけた。

その言葉に私が顔を上げると、珍しくニヤニヤとミカゲがリアと笑い合っていた。私が不思議そうにその様子を見てみると、リアが口を開いた。

「帰ってからの楽しみです。日が昇りきるまでに宿に行きますよ」
そう言って、白み始めた空を見つつ、私たちは3人肩を並べて走り始めた。

愛憎（後書き）

フラグー！

次回、あの人が超久しぶりに登場！？

???「みんな、俺のこと覚えてるよな!？」

懐かしい顔（前書き）

あの人が再登場。懐かしい。懐かしすぎます。

……というか、本編では名前しか出てないんだよね。この人。作者が可哀想過ぎて番外編の主人公にしちゃうほど、出番が少ない。思い立って、ここで再登場させてみました。

懐かしい顔

「よお、師匠！ 久しぶりだな！」

「な、あんた、何でここに来てるのよ！？」

宿屋に戻って一番最初に見たのは、図々しくも私のベッドに寝そべり、片手をあげて挨拶してくる”虎ネコ族”の少年、トーマだった。

私はトーマをジトつとした目で見つめると、あろうことは本人は笑いながら私に話しかけてきた。

「何だ、道場の奴らが心配か？」

「当たり前じゃない！ あんたが面倒見てたんじゃないの！？」

「うん、まあ、そうだったんだが。いろいろあつてな……」

「そうなんです、師匠！ トーマさんたら木とか石とかが言伝に師匠が危ないって聞いていてもたってもいらなくてここまで来たそうですよ」

「とは言っても、ちょっと遅かったみたいだけだな」

「んなことどうでもいいわ！ 私って、そんなに信用ないかしら？」

トーマはちよつと困ったように考えてから、また口を開いた。

「信用というか、師匠って妙なところで自分の中に溜めこんじゃうから心配というか……」

酷い言われようである。私は一応自分の中で抱え込み過ぎないようにとときどき息抜きもしているというのに。

「んなことあんたたちに心配される筋合いはないわよ。それよか道場の子供たちのほうがよっぽど心配だわ」

「それこそ心配される筋合いはねーよ。あいつら、師匠が思ってるほど柔じゃねーぞ」

そんなこと分かっている。私とこいつらが育てたんだから。戦闘能力、生活能力、全てにおいて信頼はしている。ただ、子供を置いていく母親の気持ちというのだろうか、信頼と心配はまた別のもの

だ。

「……なんてことあんたらに言っても分からないんだろうな」

トーマだけでなくミカゲとリアまで頭の上にはてなマークを浮かべている。

「ま、これを機会に子離れするか……。ホントに大丈夫なんでしょうね？」

トーマをジトつとした目で見る。トーマは当然とでもいうような顔で答える。

「そもそも師匠は心配し過ぎなんだよ。俺は当然として、ミカゲやリアを始めとしてあいつらを見てれば分かるこつたろう。ホントは師匠が一番分かってんだろ？」

「そこで何故あんたが当然なのか気になるけど、まあいいわ。確かに私が連れていった子たちだしね。分かったわ」

私は手を挙げて降参のポーズを作る。それを満足そうに見ているトーマ。ふと外野が静かになっているのに気がついて、周りを見回す。そこにいたのは目をキラキラと輝かせているリアと、興味を失くしたのか、空いてるベッドに横になっているミカゲだった。

「すごいです、トーマさん！ 師匠にそこまで言えるなんて！ 尊敬です！」

と、目を輝かせているリア君。尊敬するのはそこか！？

「いや4年以上もつきあってればこうなるって。師匠に何か言いたいことがあるば遠慮なく俺に言え。俺から師匠に言つてやる」

「調子に乗るな、このバカ！」

私に頭をはたかれるトーマ。これは当然の結果だと思う。

「痛え！ 痛えよ、師匠！ 冗談とか抜きで。本気で痛いっす！」

「当然だ。6割くらいの力で殴ったからな。これ以上力いれると骨にひびが入ると思うが、試してみるか？」

「遠慮します！」

私たちがぎゃいぎゃい騒いでいると、部屋の隅のベッドからだるそうな声が聞こえてきた。

「煩い。静かにしてください。他のお客様にも迷惑です」

「なんだよお、ミカゲ。久しぶりなのにつれないじゃないか。お前もこっち来て混ざれよ」

「何で僕がトーマさんとちと騒がなきゃいけないんですか。迷惑です」

「何だよ。昔はもつと可愛げがあつたのにな。おい、リア、俺と遊ぼーぜ」

「嫌です。トーマさんの遊びって、稽古じゃないですか。トーマさんの相手は嫌です」

みんなに振られて一人しよげているトーマ君。不覚にも笑ってしまった。

「何なら私が遊んでやろうか？ 久々に」

「え、師匠と……？」

「何よ、その顔。嫌なら別にいいわよ。帰ってからたつぷりと遊んであげるから」

「それも嫌……！」

何やら一人真剣に考え込んでいるトーマ。今しごかれるのも帰ってからしごかれるのも嫌だな……とか何とかブツブツ言っているが、無視。

「ま、今日はもうだいぶ疲れたしな。明日遊んでやる。お前に相手させてやりたい奴もいるしね……」

そこで私は部屋を見渡した。そこでふとあることに気がつく。

「リア、ミカゲ。フィアとフィイは？」

「2人は今隣の部屋です。貴女が帰ってくる前に眠ってしまったので。貴女が帰ったら起こしてほしいと言ってましたよ。一応2人をバラバラの部屋に寝かせるのはどうかと思ったので、一緒に寝せておきました」

ミカゲがそこまで言ったところで、部屋のドアが開く。そこからちょこんと顔を覗かせたのは、私がちょうど探していた顔。

「あ、セーラさんだ！」

「だ！」

そう言うなり、2人は私の元に駆け寄ってきた。その様子の何とも可愛らしいこと。傍にいたリアに目をやると、逸らされた。あんなに期待はするなということか。

「こいつが私の1番弟子、トーマよ。こっちは見れば分かると思うけど、狼族の双子、姉のフィアと弟のフィイよ」

「よろしくな」

「よろしくお願いしますー」

「すー」

3人は和やかに握手を交わす。互いに手を離したところで私はまた口を開く。

「あんたに稽古の相手をさせたいのはこの子たち。どう、見た目では？」

「どうって……。この子たち、稽古できるのか？ 師匠が俺に相手させたいと言うからには相当な腕なんだろうけど」

「この子たち、こう見えてもリアと同年よ。腕もリアと同じかそれ以上。リア、あんたもうかうかしていると抜かれるわよ」

「そこで僕に話が飛ぶんですか！？」

こうして、私の帰還は和やかに歓迎されたのだった。

いじる（前書き）

相変わらず、リア君はいじられています。いじる人は増える一方で
す。

愛ゆえにみんないじってるんです。

いじる

翌朝、早速私たちはトーマも加えて早朝稽古にいそしんでいた。ちなみに今日の組み合わせは、私とファイア、トーマとファイイ、ミカゲとリアだ。

「そ。そこそこ。んでもって身体回したらこっちから」
「はい！」

流石、というべきか、基本的どころか応用編までかなり出来上がっているファイイ相手に、細かい指摘をしながらも全て受け流すかわしているトーマ。もちろん、わざと受けているのはファイイが体勢を崩さないようにするためだ。自分のダメージが最小限になるようにうまく受け流している。流石、私の1番弟子ね。

「そこで、膝を伸ばさない！」
「はう！」

とか言う私も指摘しつつ、かわしたり受け流したり。ついでに余所見までしている。流石は師匠？

「リア、いい加減僕に一発でも当ててください」
「うゝ、じゃあ動かないでくださいよゝ！」

情けない声が聞こえてきたと思ったら、リアだった。リアはかなりの速さで身体を動かしているのだが、なにせ相手はミカゲだ。未だに攻撃の一つも当てられないでいる。空振りしてもたいして体勢を崩さないのは流石というべきか？

「ふわああ」

とうとうミカゲが欠伸しだした。両手を頭の後ろで組んでいかにもつまらなそうだ。しかし全て攻撃はかわしている。そんなミカゲを前に、リアはもう涙目になっていた。

「リア！ あんた師範代でしょ！ ミカゲに一発くらい当てられなくてどうすんの。ミカゲが稽古で欠伸するなんて、そうそうないわよ！」

「そんな、師匠、僕だつて頑張つてるんですつて！」

「トーマさん、相手交換しませんか？　僕がフィイの相手しますよ」

「ミカゲさん！？」

「おお、いいぞ。リアの相手なんて久しぶりだな！」

「トーマさんまで！？」

リアのプライドは粉々に打ち砕かれたようだが、そんなの気にする2人ではない。諦める、リア。

「さて、久々だからなあ。たっぷりしごいてやる」

「トーマさんのしごきは半端ないんですからね！　そこ、自覚します！？」

「師匠のしごきに比べたらマシだろ？　さてと、どこからでもいいぞ」

「あら、私と比べたらマシ、とはどういうことかしら？　ねえ、リア？」

「そこ、僕に聞くんですか！？」

そろそろ本気で泣きだしそうになってきたので、いじるのはここまでにしよう。あ、苛めてるんじゃないよ。愛ゆえにいじっているの。

—— 2分後。

「ほら、リア！　早く俺に当ててみるよ！」

「結局相手が変わつても一緒じゃないですか！！　というかレベル上がってますからー！！」

やっぱりトーマに全てかわされていた。ついでに言うと、トーマは頭の後ろで腕を組み、時折ミカゲが相手をしているフィイにアドバイスをしている。当然、リアのほうは見えていない。

「あんた器用ね……」

「感心するところ、そこですか！？」

「私なら目瞑つてもかわせるわよ、あんたくらい」

「僕もう泣いていいですよね!？」

宿の朝食の時間が迫ってきたので、稽古をお開きを宣言すると、年下3人組はその場にへたり込んだ。もちろん、私たち年上組は息ひとつ乱してはいない。

「お疲れ様。朝食の前に身体も拭いておきなさい。ちゃんと着替えもするのよ」

「はい」

双子は私の言葉にそろっていいお返事を返してくれた。リアはというと、小さく手を挙げて、質問、といった。

「何で師匠たちは僕の攻撃を全て楽々とかわせるんですか？」

「そんなの自分で考えなさい」

私の即答にリアがあからさまにがっかりした顔をする。そもそも私がそう簡単に教えると思ったか。しかし、先輩2人はいくらなんでも可哀想だと思ったのか、丁寧に答えてやることにしたようだ。

「お前は、気配が強すぎんだよ」

「気配、ですか？」

「そうです。リアは気配を殺す、というようなことはしてないでしょう？ 気配というのは、そうですね……」

ミカゲは急に言葉を切ったかと思えば、いきなり私に回し蹴りをしてきた。私は少々驚きながらも難なくかわす。

「あら、はずしましたか。まあ、貴女ならかわすと思いましたけど。リアは今、僕が攻撃しようとしたことは感じ取れましたか？」

「……全く」

「このように、相手に攻撃するという意思、動きを悟られないようにすることを気配を絶つ、殺す、といいます」

「なるほど」

「で、お前はこれから攻撃します、っていう気配がだだもれなんだ

よ。これじゃ、これからここに攻撃するのでかわしてください、って言ってるのと同じだぞ」

「そうだったんですか……」

自分の弱点が分かかって満足したのか、リアは気配を絶つ、気配を絶つ、と繰り返しブツブツとつぶやきながら、宿に入っていった。あ、いいこと思いついた。

私は自分の気配を絶つと、リアの後をそっと追った。私が何をしようとしているのか気がついたのか、トーマとミカゲが呆れたような視線をよこすが、無視。

リアに追いつくと、気配を絶ったままリアの肩を叩く。

「気配を絶つていうのは、こうするのよ」

「ふぎやう!？」

相当驚いたのか、リアが変な声を上げた。その驚いた顔と声を聞いたから私は満足。いやー、面白かった」

「師匠! ヒドイじゃないですか!」

「私は気配の絶ち方を教えただけ。どう、分かった？」

「分かるわけじゃないですか!」

「あんたもまだまだねえ」

「師匠なんか、大っ嫌いだー!!」

あ、とうとうリアが泣きながら走って逃げちゃった。いじりすぎたか? ……ご飯、大盛りにしてやるか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3745w/>

気ままに。

2011年11月27日15時55分発行